

中国語を母語とする日本語学習者の語りの談話における表現と構造
—日本語母語話者との比較を通して—

2012年3月

一橋大学大学院言語社会研究科
博士課程

学生番号 : LD072003

氏 名 : 烏 日 哲

目次

第1部 本研究の前提.....	4
第1章 研究の動機と問題の所在.....	4
第2章 先行研究の概要と本研究の位置づけ.....	7
2.1 先行研究.....	7
2.2 本研究の位置づけ.....	13
第3章 本研究の調査の方法.....	14
3.1 調査材料.....	14
3.2 調査の対象.....	18
3.3 調査の手続き.....	21
3.4 実施期間と場所.....	22
3.5 文字化の方法.....	22
第2部 語りの基本的特徴.....	23
第4章 「絵本との一致度」から見た学習者と日本語母語話者の語りの特徴.....	24
4.1 日本語学習者と日本語母語話者の語りに関する先行研究と本研究の特徴.....	24
4.2 研究対象と方法.....	25
4.3 量的に見る一致度の違い.....	27
4.4 質的に見る一致度の違い.....	29
4.5 日本語学習者の「低一致度」表現志向.....	31
4.6 日本語母語話者の「高一致度」表現志向.....	35
4.7 日本語学習者と日本語母語話者の語りの基本的特徴のまとめ.....	38
第3部 表現から見た語りの特徴.....	40
第5章 実質語の使用から見た語りの特徴.....	41
5.1 日本語学習者の表現に関する先行研究.....	41
5.2 日本語母語話者との比較から見た日本語学習者の実質語選択の特徴.....	42
5.3 日本語学習者の実質語選択に対する母語の影響の検証.....	51
5.4 表現選択の特徴のまとめ.....	54

第4部 構造から見た語りの特徴.....	55
第6章 語りの開始部と終結部における特徴	56
6.1 語りの構造に関する先行研究.....	56
6.2 日本語母語話者との比較から見た日本語学習者の語りの構造	58
6.3 日本語学習者の語りの構造に対する母語の影響の検証	71
6.4 日本語学習者の語りの構造のまとめ	77
第7章 接続表現における特徴.....	78
7.1 接続表現に関する先行研究	78
7.2 日本語母語話者との比較から見た日本語学習者の接続表現の特徴	79
7.3 日本語学習者の接続表現に対する母語の影響の検証	88
7.4 接続表現のまとめ.....	93
第5部 本研究のまとめ.....	94
第8章 おわりに.....	95
8.1 まとめ.....	95
8.2 残された課題.....	98
本稿の各章と既発表論文との対応.....	100
引用文献	102
参考文献	104
添付資料	
日本語学習者のデータ (CJ1~CJ9)	(1)
日本語母語話者のデータ (CJ1~CJ9)	(22)
日本語学習者のデータ (JJ9~JJ20)	(38)
日本語母語話者のデータ (JJ9~JJ20)	(57)

第 1 部 本研究の前提

第 1 部では本研究の目的、先行研究と本研究の位置づけ及び調査方法について述べる。

第 1 章 研究の動機と問題の所在

本研究は、中国語を母語とする上級日本語学習者が日本語で一まとまりの発話を行うとき、文法的にも意味的にも適切性が高いにもかかわらず、日本語母語話者の発話と比較すると話し方が違うのはなぜかという疑問に端を発している。従来の研究では、日本語教育の観点から、日本語母語話者と異なる日本語学習者の話し方の特徴を「不自然さ」とよび、その原因を日本語の習熟度の問題に還元し、いかに日本語を上達させ、日本語母語話者に近づけるかを目的とするものが多い。しかし、本研究では、不自然かどうかではなく、日本語学習者がストーリーをどのように伝えているかに焦点を当て、その語り方の傾向を明らかにすることを目的とする。その点では、本研究は以下の金（2008）と共通の立場に立つ。

「言語とは、情報伝達的手段であると同時に、人間の思考や発想、社会文化的価値観といった心的態度の反映でもある。こうした話者の心的態度の言語表現への反映のあり方には、当然ながら個人による相違が想定されるが、一方、仮に、話者の属する言語集団に何らかの共通する傾向が存在するのであれば、その結果として言語表現にも、言語の相違による一定の傾向的な違いが生じるのではないかと考えられる。」

（金 2008 : 1）

本研究の動機は中国語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者のどこか異なる語り方の背景に、話者の言語運用における心的態度の問題が深く関わっているのではないかという疑問に基づいている。特に、ある程度熟達度が高い上級日本語学習者においては、その発話に文法的な誤りがない場合でも、日本語母語話者とはどこか異なる「違和感」を伴うことがある。こうした「違和感」の背景には話者が情報をどのようにとらえ、どう表現しているのかといった内面的な心的態度が深く関わっていると思われる。また、同じ場面や事柄をどのように描写し、

その話自体をどのように構築しているのかというのは、社会、文化的な背景によって傾向的な違いがあるのではないかと思われる。

そこで、本研究では、中国語を母語とする上級日本語学習者に字のない絵本を見せ、その内容を日本語母語話者相手に話してもらい、その言語表現について分析を行なった。また、その背景にあるものとして言語間の傾向的な差があるかどうかを探るため、日本語と中国語の母語話者にそれぞれ母語で話してもらい、日本語と中国語のデータを収集した。

こうして収集した談話資料を本論文では「語り」と呼ぶ。ここでいう「語り」とは「ある出来事を時間的・空間的連続体として、その流れに沿って再現したことばのまとまり」とであると定義する。

論文全体の構造として、各章において、まず中国語を母語とする日本語学習者の日本語による語りの談話の特徴について分析する。そしてその特徴は、日本語学習者の独自のストラテジーなのか、母語の影響による結果なのかを探るために中国語母語話者の語りについて分析を行なう。その結果から、日本語学習者の語りの特徴が形成された原因を究明すると同時に、日中両言語の語りの特徴について比較対照を行なう。

本論文の枠組みは以下の通りである。

第1部は本研究の序章であり、第1章、第2章、第3章からなる。第1章では、まず研究動機と目的について述べる。

第2章では、本研究に関連する先行研究を紹介した上で、本研究の意義について述べる。

第3章では、本研究に用いるデータの収集方法、文字化の方法について説明する。

本研究の本論は大きく3部で構成しており、枠組みは次の通りである。

第2部第4章では、まず、学習者と母語話者の語りの全体像を把握するために、絵本との一致度という観点から学習者と母語話者のそれぞれの語りの全体的な特徴を浮き彫りにする。

第3部第5章では、学習者と母語話者の個々の表現的特徴を明らかにするため、

実質語の使用について比較する。さらに、中国語母語話者の語りについての分析を加えることによって、母語の干渉がどのような影響を及ぼしているかについて明らかにする。

第4部では、学習者と母語話者の語りの構造に注目し、それぞれの展開における特徴について分析する。

具体的にいうと、第6章では、学習者と母語話者の語りの冒頭部と終結部における特徴について分析し、中国語母語話者の語りと対照しながら、それぞれの特徴を明らかにする。

第7章では、学習者がどのような談話標識を使って、語りを展開しているのかについて、接続表現の使用の違いを比較分析する。

最後に、第5部第8章では、本論文のまとめ、および残された課題について述べる。

第2章 先行研究の概要と本研究の位置づけ

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者（以下、日本語学習者）と日本語母語話者、中国語母語話者の談話を比較分析するため、話し手に絵本を見せ、その内容を話してもらうという調査方法を用いた。第2章では、本研究と同様に学習者のストーリー・テリングを取り扱った先行研究と学習者のナラティブに注目した研究を紹介した上で、本研究の意義を述べる。

2.1 先行研究

4コマ漫画を用いて表現の違いを測る研究には、早くから堀川(1968)がある。

堀川(1968)は『クリちゃん』という4コマ漫画を題材に、それぞれ職業が異なる被調査者に400字の文章を書くよう課題を課した。そこで、同じ題材にもかかわらず、職業によって漫画の内容が異なるという興味深い結果が得られた。

こうした研究は海外でも行われている。Chafe(1980)は、『梨物語(Pear Stories)』という短編映画を作り、それを見た種々の言語圏の人々(各20人ほどずつ)が、その映画の内容をどう表現するかということを通して文化比較研究を行った。結果として、特に英語話者とギリシャ語話者の間で大きな違いが見られ、英語話者は映画観客視点に対し、ギリシャ語話者は物語内視点であり、英語話者は行為客観で、傍観報告の傾向があるのに対し、ギリシャ語話者は行為意味解釈を好み、事象意味解釈の傾向があると指摘している。更に、こうした違いは、英語とギリシャ語の言語そのものの違いによるものではなく、言葉を使って「人にあるまとまった考えを伝達する」仕方に異なりがあるのだろうと考えられたのである。

以下では、漫画を談話分析の題材にし、学習者と母語話者の談話を比較分析した研究について見てみたい。

2.1.1 学習者のストーリー・テリングに関する先行研究

本研究は、学習者と母語話者の談話を比較分析する上で、話し手に絵本を見せ、その内容を話してもらうという調査方法を用いた。本研究のように、漫画やアニメーションを見せてその内容を話してもらうという方法を用いた先行研究はいく

つかある。

4コマ或いは6コマ漫画を談話分析の題材とした研究には、栃木(1989)、田代(1995)、渡邊(1996)、増田(2000)、庄司(2001)などがある。

栃木(1989)、渡邊(1996)、庄司(2001)は、オーラル・ナレーション¹の手法でデータを取っているが、田代(1995)、増田(2000)は書かれたテキストを用いている。

田代(1995)は、台詞のない10コマ漫画を資料とし、それぞれ日本語、中国語、韓国語を母語とする日本語学習者と日本人母語話者に長さ300字程度の作文を書かせ、中上級日本語学習者の文章表現の不自然さ・分かりにくさの原因を、情報量、接続助詞の使用、視点などの観点から探っている。

結果として、内容の情報量に違いはないが、母語話者は接続形式として、連用接続と「て形」接続を併用しているのに対し、中国語、韓国語話者では「て形」接続への依存が見られること、また、視点の置き方にも異なりが見られることを報告している。

栃木(1989)は、特に接続形式に焦点を当て、学習者は明示的な接続形式を使用できず、結果的に発話が短文の羅列になってしまっているケースが多いこと、または、接続形式を使用しても母語話者が用いない形式の使用傾向が見られることを示した。

一方、渡邊(1996)は、中上級学習者の談話における不自然さを談話展開の立場から分析している。4コマ漫画を見せ、日本語話者と学習者の日本語、学習者の母語、合わせて3種類の談話資料をデータとして用いている。また学習者の日本語と母語との関係の有無を明らかにするために、言語類型の異なる韓国語・ドイツ語・中国語を母語とする日本語学習者の言語資料を考察し、母語別に展開スタイルをモデル化して日本語母語話者との比較を行っている。

母語話者の談話展開においては、意味上での接続だけでなく、固定注視点、受身形・授受補助動詞、「て形」接続、指示詞、などの要素が総合に連動しあって展開スタイルを組み立てていることを明らかにした。そして、それと学習者の産出テキストを「母語別」に比較し、特に視点の置き方や「接続形式(接続助詞て形接

¹ 「オーラル・ナレーション」とは「調査協力者が絵(この場合は4コマ漫画)を見てその内容を口頭で表現し、説明する方法」(渡邊 1996: 8)

続)」に母語の影響があることを示した。

増田(2000)は、母語話者とさまざまな学習レベルにある学習者とが書いた4コマ漫画のストーリー内容を書いたテキストを用いて、日本語学習者が産出したテキストの展開に見られる構造の特徴を学習レベル別に考察している。

母語話者が内容転換の際に特定の言語表現形式を使用するのに対し、学習者は接続助詞、接続詞に大きく依存していることを示した。また、初級後期レベルの学習者は単文+接続形式でストーリーを展開しようとしており、「から」や「それで」などの強い因果関係を明示的に表す形式の使用が多かったが、学習レベルが高くなるにつれ、これらの形式があまり見られなくなると指摘している。

庄司(2001)も6コマ漫画を見せ、その内容を話してもらう方法を用いたが、これらと違って、談話における語彙選択に着目している。そのデータで語彙選択における外国人学習者の発話文と日本人学生の発話文との違いを分析している。

母語話者に必ず選択されている語が日本語学習者の発話文ではまったく、もしくはまれにしか見出されていない、さらに、日本語学習者の発話には、語義を恣意的に拡張して転用したり、言い換えによって未知語を補うという戦略が用いられていることを示した。

話し手にアニメーションを見せて、その内容を語らせた先行研究には古本(1997)、ザトラウスキー(2002)と渡辺(2003)などがある。これらの研究で使用されたビデオは全て「ピングー」というクレイ・アニメーションのシリーズである。

古本(1997)は、日本語母語話者がビデオで見たストーリーを、学習者と母語話者にそれぞれ語る場面に現れる身ぶりを観察し、母語場面と接触場面の身ぶりの現れ方の違いを分析している。

接触場面では身ぶりが全体として母語場面より多く現れ、特に意味交渉や強調、指示、位置を示す身振りは顕著に多かった。その理由としては、母語話者が言語面の能力が不足している学習者に分かりやすく話そうとした結果ではないかと述べている。

ザトラウスキー(2002)も非言語行動について触れているが、それを異なった「話

段」に現れる特徴の一つとして扱っている。研究では、日本人 6 名、アメリカ人 12 名にアニメーションを見せて、日本語と英語で内容を語ってもらったビデオを資料とし、段落を視点において、各「話段」の開始発話、終了発話、中心発話にどのような特徴があるか、話し手と聞き手はどのように言語・非言語行動を使って話段を作り上げるのかについて示した。これは、従来の「話段」の研究と違って、参加者全員が相互に情報を提供しあう勧誘や雑談のような談話ではなく、語り手が主な情報を持ち、聞き手に語る談話を研究対象とした研究である。

ザトラウスキー(2002)は、話し手の談話を撮ったビデオをそれぞれ被調査者 9 人に 2 回見せ、どこで内容が変わっているのかを判断させた上で、内容にタイトルをつけさせた。また、文字化資料にそれぞれの内容区分の始まりと終わりを指摘してもらおうという「内容区分調査」を行った上で過半数が指摘した区分を「話段」、「重要な発話」、「中心発話」と認定し、それを基準に分析している。

その結果、アニメーションを語る談話では、開始発話で登場人物・時間・場所を、中心発話で主な出来事を、終了発話で確認・理解・感想を述べるという結論が得られている。

渡辺(2003)はストーリーを語る際に登場する人物を指示する指示表現と談話構造のかかわりに着目し、英語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者の談話を比較している。

日本語母語話者は、場面の境界などで指示表現の原則的な選択の仕方に則らずに語ることが多かったが、それは登場人物間の重要度の違いを示す手がかりになっていると分析している。

それに対して、学習者の談話では、動作主が代わるたびに名詞句を用い、接続性の高い主要な指示対象をずっと省略し続けていることが観察された。そしてそれは、談話を構造化する技術の未熟さを示していると指摘した上で、学習者のこのような指示表現の使い方が談話のまとまりを示す一手段であると示している。

2.1.2 学習者のナラティブに関する先行研究

本研究と同様に、学習者の「語り」に着目した先行研究には、酒井(1997)、木田・小玉(2001)、南(2005)などがある。

酒井(1997)と木田・小玉(2001)は、日本語中上級学習者の口頭ナラティブ能力を高めるための授業報告である。

酒井(1997)はまず、第1段階では、①日本語母語話者に怖かった体験を聞かせ、②その談話の節を中心にした全体の枠組みやその中で使われるさまざまな文法項目や表現を見ていき、③その談話に出てくる節の表出順序に沿って、自分の体験談を話し言葉で書き、次に口頭でそれを発表させている。節で見ることによって、日本語母語話者の談話構造の類似性が現れ、学習者に日本語母語話者の談話構造の特徴を意識させている。

第2段階では、学習者各自に周りの人の体験談を談話分析させ、教室で学習した項目が実際にどう使われているかを見、学習者自身にそれぞれ発表させている。

こうして、談話の骨組みから、文法項目まで学習することによって、日本語中上級学習者の口頭ナラティブ能力を高める効果を得た。具体的には、学習者の体験談は素材はいいものの、突っ込みが足りず、掘り起こし方が弱い。またトピックの詳細化、細部化に欠けるものが多く、焦点が複数になっていると指摘し、①もっと並列節を使って、節と節をつなぎながら話すべき、②サスペンスを生かすために、事件の結末について述べるのはもう少し後に引き伸ばすべきなどの談話全体から見た指導が必要であると述べている。

木田・小玉(2001)も、学習者に日本人の体験談の談話分析をさせているが、「雑談」というインフォーマルな場面を扱っている。上級日本語学習者がどの程度口頭ナラティブ能力を持っているのかをまず評価し、また、その後教師側からのインプットにより学習者のナラティブがどのように変化するかを2点を調査している。

学習者はインプットする前に「です・ます」で話しており、フォーマルなスピーチのようであった。また、擬音語・擬態語の使用が少なかったと指摘している。指導後には、くだけた表現が増え、インフォーマルな会話に使用される接続詞「で」や「って」などが使用されるようになり、感情や判断の直接の表明を抑制する様子を表す副詞「まあ」の使用が観察されたと報告している。

南(2005)も、酒井(1997)、木田・小玉(2001)と同様に学習者の「体験談」を資料として日本語学習者のナラティブ分析しているが、学習者と日本語話者との比較ではなく、英語を母語とする中級と上級の日本語学習者に過去の経験を日本語で語ってもらい、学習者の言語習熟度と語りの構造の関係を分析している。

南(2005)は、Labov(1972)²のような第1言語習得の分野ではナラティブ研究が盛んに行われているが、第2言語習得の分野ではあまり研究されていないことを指摘した上で、上級学習者と中級学習者のナラティブにおける違いを、①与えられた話のトピックに関わらず、上級学習者のほうが中級学習者よりもナラティブが長く、話の推移・展開ばかりでなく、話の背景に関する情報をより多く含める傾向が認められた、②上級学習者がタスクとして与えられたトピックー静態的なトピックか動態的なトピックかーに応じて比較的柔軟な対応することが可能であるのに対して、中級学習者ではそうした柔軟性を持つ段階にまでは至っていなかった、③上級学習者が話を生き生きと語るための修辭的技法(例：引用節)を駆使できる点であった、との3点にまとめている。

² Labov(1972)は「個人的経験物語」を「過去の経験を時間の流れに沿って再現すること」と定義し、ニューヨークのアフリカ系アメリカ人の若者に「死にそうな目にあった」体験談を収集、分析し、ある社会階級内に存在する特有の「語り方・話し方」を検証し、言語・文化固有性と普遍性を探求したものである。

2.2 本研究の位置づけ

以下では、これらの先行研究を踏まえた上での本研究の特徴を述べる。

本研究はまとまった談話を取るために、データの収集方法として先行研究と違って台詞のない絵本を用いた。絵本を用いた理由は、漫画の内容はすでにはっきりとコマで分けられて、ストーリーの展開がパターン化されており、自由な展開が観察されにくいと考えたからである。絵本の場合は、漫画より比較的長く、ストーリーをまとめる力や説明する能力がより求められると考えられる。また、漫画に慣れ親しんでいる日本語母語話者と違って中国語母語話者は漫画に慣れてないことが多く、データの質に影響が出る可能性が高いのに対し、絵本はどの国でも小さい頃から見えており、中国語母語話者に特に不利になることはないと考えたためである。

本研究の分析は2段階に分けて行なった。

研究対象である中国語を母語とする上級日本語学習者（以下日本語学習者と略す）はすでに高度な文法や語彙力を備えており、普段の日本語の使用には何の支障もない。それでもまとまった談話を行う時にどこか不自然と感じさせるのは、談話の全体の構造や表現のスタイルの違いからではないかと推測する。

そこでまず、日本語学習者と日本語母語話者の日本語の語りについて比較する。具体的にストーリーを構成するときどんな表現の手法を用いて、どんな表現を使って談話を進めているのか、また、話し手は談話の最初に何を持ってきて、どう展開して行って、最後にどう終結しているのかといった談話の構造という二つの視点から考察を行なった。

その結果をさらに、中国語母語話者の中国語による語りと照合し、日本語学習者の語りの特徴を生み出した原因を明らかにする。この後半の段階では、中国語の語りを分析し、日本語学習者の語りの表現と構造を形成した原因を究明する。

こうした二段階の分析方法手順を踏むことによって、日本語学習者の語りを談話というレベルから捉えることができ、さらに日本語学習者ならではの語りの構造の背景にあるものが母語での検証によって解明できるのではないかとと思われる。

第3章 本研究の調査の方法

本章では、調査に用いた資料、調査対象、調査の手続きなどの調査方法を紹介する。

3.1 調査材料

本研究では、収集する言語資料をコントロールするために、絵本を調査材料とした。³

絵本を調査材料に選択したのは次の理由からである。

- 1、文字がなく、絵だけで内容を理解するので、日本語学習者と日本語母語話者の理解にかかる負担は同じである。
- 2、ストーリーの展開性を備えており、場面変化が多いので、物語の内容を噛み砕いて表現する即興的な能力を試すのに最適である。
- 3、漫画より絵本のほうが文化的背景を異にする人でも理解が容易である。
- 4、漫画のように短くはなく、ストーリーが4コマや6コマで決まっているわけでもないため、より説明力が問われて、被調査者の特徴が出やすくなる。

以下では、実験に用いた絵本について紹介する。

『アンジュール ある犬の物語』はベルギーの作家ガブリエル・バンサンGabriel Bansonの鉛筆デッサンによる絵本である⁴。全作品は54枚の絵からなっている。『アンジュール』はフランス語で一日という意味であり、この絵本は犬の一日が描いたものである。以下では絵本をページごとに背景と登場人物、状況に分けて紹介する。背

³ 調査方法は渡邊(1996)を参考にした。渡邊(1996)によると、コントロールした言語資料は、①談話の内容があらかじめ決まっているので、学習者は発話内容を考える必要はない。したがって、話者の表現能力にあまり左右されない言語資料を収集できる。②考察に必要な部分の表現を、話者全員の言語資料からほぼ同じように抽出することができ、それらを数量化して比較することができる。(渡邊 1996 : 7)

⁴ この絵本の選定に当たっては、石黒のアドバイスを参考にしている。

景は絵本の後ろについている訳者の絵本に対する解釈を参考した。⁵主な場面展開は本論文の筆者が絵本の展開を掴みやすくするために分けたものである。

具体的には次のような場面で構成されている。まず一匹の犬が飼い主と思われる何者かによって車の中から車外に捨てられてしまう。捨てられた犬は道で飼い主を待ち続けるが、飼い主の姿は見えない。犬は飼い主を求めてさまよい始める。犬は道を渡ろうとして突然飛び出したため、それを避けようとした車と対向車線の車が衝突し、交通事故になってしまう。その後、犬は事故現場から離れ、野原や海辺のようなところでさまよい続ける。やがて町らしきにぎやかなところに着き、最後にある少年と出会うのである。

【表 1】 絵本の内容説明

頁	背景	前景	状況	主な場面展開
P4 ⁶	野原、道	人が乗っている車、犬	犬が走っていく。車から捨てられる。	犬が捨てられる
P5	野原、道	車、犬	車が走っていく。犬が後から追っている。	犬が車を追う
P6	野原、道	車、犬	車が走っていく。犬が後から追っている。	
P7	野原、道	犬	犬が走っている。	
P8	道	犬	犬が走っている。	
P9	野原、道	車に乗っている人、犬	車を運転している人が振り向いて追っている犬を見る。犬は黒い点になっている。	
P10	野原、道	車、犬	犬が遠くへ走っていく。車を追っている。	
P11	野原、道	犬	犬が走っている。	
P12	道	犬	犬が遠くへ伸びていく道の真ん中に立っている。後姿。	かなくなる
P13	野原、道	犬	犬が下を向いて歩いている。	

⁵ 絵本の後ろについている訳者の解釈は、被調査者に一切見せてない。

⁶ 絵本は P4 から始まっている。

P14	野原	犬	犬が下を向いている。後姿。	
P15	野原	犬	犬が頭を上げて遠くを見ている様子。正面から。	犬が道端でさまよっているが、道路を渡る時に交通事故を起こす
P16	道、道端	何台かの車、犬	何台かの車が走ってくる。犬が道端に座って車を見ている。	
P17	道、道端	車、犬	犬が道端に立っている。車が走ってくる。	
P18	道、道端	車、犬	犬が前足を上げ、道端から飛び出そうとしている。車が走ってくる。	
P19	道	車、犬	犬が近づいてきた車の前に入る。	
P20	道	対向して走る2台の車、犬	犬が道を渡る。対向して走ってくる車の間を通る。	
P21	道	4台の車	車が衝突する。衝突した車の後ろにも車がある。	
P22	なし	犬	犬が振り向きながら走っている。	
P23	道	何台かの車	一台の車が横転している。それを何台かの車が遠くから見ている。	
P24	道	何台かの車、人々、犬	横転している車3台を、人々が見ている。犬も見ている。	
P25	なし	犬	犬が振り向きながら歩いている。	
P26	道	車、犬	犬は振り向きながら、車が走っている道を後にする。	
P27	道	車、人々	事故現場にたくさんの人が集まっている。絵全体が黒くなっている。	
P28	道	たくさんの車、人々	たくさんの車や人々が集まって、渋滞になっている。	
P29	野原	犬	犬が振り向いている。	いろいろなどころをさまよう
P30	野原	犬	犬が歩き出す。	
P31	野原	ポストのような物体、犬	ポストのような物体のそばで、犬が後ろ片足をあげている。	

P32	浜辺	犬	犬が歩いている横姿。遠くに小さい黒い点が二つある。
P33	浜辺	黒い影、犬	犬が黒い影に後ろから近づいて、見ている。
P34	浜辺	小さい黒い点、犬	黒い影が黒い点になっている。犬がそれを見ている。後姿。
P35	浜辺	小さい黒い点、犬	犬がほかの方向を見ている。後姿。
P36	浜辺	夕日、犬	太陽が沈んで黒くなっている様子。犬が上を向いて遠吠え。
P37	浜辺	小さい黒い点、犬	犬が黒い影を後にして歩く。
P38	汀	犬	犬が走っている。
P39	汀	犬	犬が止まっている。
P40	判別できず	犬	犬が走っている。
P41	判別できず	犬	犬が走っている。
P42	判別できず	犬	背景が黒くなっている。犬が立っている。
P43	判別できず	犬	背景が黒くなっている。犬が去っていく。足跡が残っている。
P44	野原、道	犬	太陽が地平線よりちょっとだけ出ている。犬が道の奥へ歩いていく。後姿。
P45	野原	犬	犬が歩いている後姿。
P46	煙の出ている建物	犬	遠くから煙が出ている。建物のようなものがたくさん見える。犬がそれを座って見ている。後姿。
P47	壁のようなもの	犬	犬が壁のようなものに沿って歩いている。
P48	壁のようなもの	犬	犬が壁と壁の間を通っている。

P49	建物の間	犬	犬は建物の間の細い道に立って、下を向いている。	
P50	路地	通行人ふたり、犬	犬は路地を歩いている。	
P51	路地	男の人、台車、犬	走っている犬を男の人が指している。	子供との出会い
P52	道	子供、カバン、犬	道に子供が立っている。カバンが足元に置いてある。犬がそれを座ってみている。後姿。	
P53	道	子供、カバン、犬	子供が犬に近づいてくる。犬がそれを見ている。後姿。	
P54	道	子供、カバン、犬	顔が分かるくらい子供が犬に接近。それを見ている犬の後姿。子供は笑っている表情。	
P55	道	子供、カバン、犬	顔が分かるくらい子供が犬に接近。それを見ている犬の後姿。子供は目が垂れている表情。	
P56	道	子供、カバン、犬	顔が分かるくらい子供が犬に接近。それを見ている犬の後姿。子供は目が垂れている表情。	
P57	道	子供、犬	犬は子供にくっついて顔を上げて子供を見る。子供も犬を見る。	

3.2 調査の対象

本研究では、大学学部 に在学する日本語学習者 20 名と日本語母語話者 20 名、中国語母語話者 20 名に調査を依頼した。学習者は、ある程度レベルに揃えるために、中国の大学で日本語を専攻している、日本語能力試験 1 級を合格した者に限定した。学習者の調査協力者が全員女性であったため、母語話者の調査協力者も女性に限定した。母語話者の調査協力者は全員日本の大学に在学する社会科学系学部の学部生である。

また、聞き手役として日本語母語話者 4 名、中国語母語話者 3 名に協力しても

らった。聞き手には調査が終了するまで絵本の内容を見せなかった。実際の調査においては、聞き手に話し手の発話を中断して質問をしてもよいが、できるだけ質問の箇所と回数を統一するよう指示した。実際の調査では聞き手からの質問がほとんど出なかったため、談話のデータは聞き手の違いによる干渉はなかったと思われる。

【表 2】 学習者の内訳

	性別	学年	日本語学習 歴	日本滞在歴
CJ1	女	1年	6年半	1週間
CJ2	女	1年	6年半	3週間
CJ3	女	1年	6年半	なし
CJ4	女	1年	6年半	なし
CJ5	女	3年	2年半	なし
CJ6	女	4年	3年半	1ヶ月
CJ7	女	3年	3年半	なし
CJ8	女	4年	2年半	なし
CJ9	女	4年	3年半	なし
CJ10	女	4年	3年半	なし
CJ11	女	4年	3年半	なし
CJ12	女	4年	3年半	2週間
CJ13	女	3年	2年半	なし
CJ14	女	3年	2年半	2週間
CJ15	女	3年	2年半	なし
CJ16	女	3年	2年半	6ヶ月
CJ17	女	4年	3年半	1ヶ月
CJ18	女	4年	3年半	なし
CJ19	女	4年	3年半	なし
CJ20	女	3年	2年半	なし

【表 3】聞き手の日本語母語話者の内訳⁷

	性別	学年	担当した話し手
聞き手 1	女	大学院 2 年生	CJ1、CJ2、CJ3、CJ4 JJ3、JJ6、JJ7、JJ8、JJ9、JJ10、JJ13、 JJ14、JJ15、JJ16、JJ17、JJ18、JJ19、 JJ20
聞き手 2	女	大学院 2 年生	CJ5、CJ6、CJ7、CJ8 JJ1、JJ2、JJ4、JJ5
聞き手 3	女	大学院 2 年生	CJ9、CJ10、CJ11、CJ12、CJ13、CJ14、 CJ15、CJ16、CJ17、CJ18、CJ19、CJ20
聞き手 4	女	大学院 2 年生	JJ11、JJ12

⁷ 聞き手の学年はすべて調査時当時の学年である。聞き手 1、聞き手 2 は 2006 年 3 月時点での学年である。聞き手 3 は 2008 年 3 月時点での学年である。また、聞き手 1 には 3 年間にわたって継続的に協力してもらった。

3.3 調査の手続き

言語資料収集の依頼を口頭または書面で行った。⁸その内容は、絵本を見てもらってその内容を聞き手に伝える作業をしてもらうことと、その全過程を録画すること、論文のデータとして使用することである。依頼の際、調査協力者が事前に準備することを避けるため、絵本の内容について説明を行わなかった。

部屋の大きさや雰囲気には多少違いはあったが、話し手と聞き手は机を挟んで相対する位置関係で一対一で行った。また、初対面による緊張感を和らげるために、飲み物やスナック菓子を用意し、数分の雑談をしてから調査を始めた。

まず、話し手に絵本を 20 分程度読んでもらった。読み終わったら、その内容を聞き手に伝えるよう指示し、聞き手役の人はまだ絵本を読んでいないことを伝えた。また聞き手役の人には分からない箇所があったら自由に質問していいと伝えた。その全過程を 2 台のビデオカメラで録画した。

具体的には、主に次のように指示した。

- 1、本を 20 分程度見てください。その間メモを取ってもかまいません。
- 2、絵本の内容を聞き手役の人に話してください。ちなみに聞き手役の人はこの絵本を見たことはありません。
- 3、絵本には、文字による説明がないので、自分の理解したまま自由に話してください。
- 4、話す時にメモと絵本を見ながら話して下さって結構です。

⁸ 中国で行った調査は、学習者が所属する大学の先生に趣旨を伝え、調査協力者を集めていただいた。母語話者に対する調査は日本人を対象にした日本語の授業の中で募集した。中国語母語話者の募集は中国の大学の学内ネットで掲示し、募集を行なった。

3.4 実施期間と場所

日本語学習者の言語資料の収集は2006年3月1日から3月11日の間1回目、2008年3月11日から3月23日の間2回目、中国の某大学構内のホテルの一室で行った。

日本語母語話者の言語資料の収集は2006年6月1日から2009年6月30日の間断続的に、日本の某大学の小教室で行った。

中国語母語話者の言語資料は2008年3月11日から3月23日の間、日本語学習者の調査と同時期に中国の某大学構内で収集した。調査時間は三者とも1人当たり約1時間である。

3.5 文字化の方法

録画したデータは筆者が文字化し、それを日本語母語話者に確認してもらった。漢字かな交じり文を使って表記し、人名、地名などの固有名詞が現れた場合、個人情報保護に鑑み、代わりに〇〇を使って表示した。母語による発話は、ローマ字で表記した。

以下は、文字化の際に用いた表記記号である。⁹

【表4】データの表記記号

表記	意味
、	非上昇イントネーション(文の間)
。	非上昇イントネーション(文の終わり)
?	上昇イントネーション
×	聞き取れない箇所
()	非言語行動
〇〇	人名

⁹ 文字化の表記方法は渡辺(2003)を参考した。

第 2 部 語りの基本的特徴

聞き手役の日本語母語話者へのインタビュー¹⁰で明らかになったことは、学習者と日本語母語話者の語りを聞いた第一印象は両者の談話展開が大きく異なることである。同じ絵本を話しているはずなのに、談話展開が全く異なるという。

まだ絵本を見ていない前提で学習者と日本語母語話者の語りを聞いているが、話し手の語りがあまりにも異なるため、絵本の内容が気になるという回答が複数の聞き手からあった。つまり、学習者と母語話者のいずれかが絵本どおりに語っているのではないということになる。

では、学習者と母語話者はいったいどのように語っているのか。

そこで、第 4 章ではまず、学習者と母語話者の語りの全体像を把握するため、絵本にかかっている絵と、話し手の発話とがどのくらい一致するのかという「語りと絵本の一貫度」に着目し、個々の発話の表現的特徴を探る。

¹⁰ 聞き手 1 と聞き手 2 に対して調査がスタートした直後の 2006 年の 4 月に口頭でインタビューを行い、学習者と日本語母語話者の語りを聞いた後の感想を訪ねた。

第4章 「絵本との一致度」から見た学習者と日本語母語話者の語りの特徴

本章では、中国語を母語とする日本語学習者（以下日本語学習者）と日本語母語話者の語りを「絵本との一致度」という観点から分析し、その表現的特徴を明らかにする。

4.1 日本語学習者と日本語母語話者の語りに関する先行研究と本研究の特徴

渡邊(1996)は、個々の文法項目をストーリーの談話展開と関連付けたうえで、中国語を母語とする日本語学習者と母語話者の談話展開が大きく異なると指摘している。

中国語を母語とする日本語学習者の談話展開は中立視点で、文の接続ではゼロ接続形式が中心であるのに対し、母語話者のストーリーの展開は固定注視点、受身・授受補助動詞、「て形」接続詞、指示詞などの要素が語りの内容と組み合わせられて談話展開スタイルを組み立てていることを示している。

また、渡辺(2003)は、英語を母語とする日本語学習者と母語話者の談話を比較しているが、登場人物を指示する表現形式とストーリーの意味的まとまりとの関わりに注目した点において示唆的である。

英語を母語とする日本語学習者と母語話者の談話には共通して指示表現の省略が見られたが、前者は場面の境界をいくつも越えて極端に長い区間で省略を続けているため、場面の区切りがわかりにくいとしている。

一方、母語話者の談話では、省略が登場人物間の重要度の違いを示す手がかりになっていると分析している。

本章は絵本との一致度という観点を採用したところに独自性がある。学習者と母語話者がいる程度長さがあり、ストーリー性のある絵本の内容をどのように聞き手に伝えているのか、ストーリーを（再）構築する際、絵本の場面をどのように再現しているのかを比較分析するのが本章の目的である。そのため、被調査者の語りと絵本にかかっている絵がどのくらい一致しているのかを測り、それぞれ

の表現の特徴を探るという方法をとった。詳しくは「4.2 研究対象と方法」で検討する。

4.2 研究対象と方法

4.2.1 調査対象

本研究では、大学の学部¹¹に在学する日本語学習者8名と日本語母語話者8名に調査を依頼した。¹¹日本語学習者は、日本語のレベルを揃えるために、中国の大学で日本語を専攻している、日本語能力試験1級に合格した者に限定した。日本語学習者の調査協力者が全員女性であったため、日本語母語話者の調査協力者も女性に限定した。日本語母語話者の調査協力者は全員都内の大学に在学する社会科学系学部の学部生である。

4.2.2 分析方法

本研究では、日本語学習者と日本語母語話者が絵本の内容をどのように再現しているかを考察するために、被調査者の談話と絵本にかかっている絵との一致度に着目し、日本語学習者と日本語母語話者があるまとまった談話を産出する際の表現の相違を探った。

具体的には、大学院で日本語を専攻する日本語母語話者2名に、調査で得られた日本語学習者と日本語母語話者のデータを絵本にかかっている絵とどのくらい一致しているのかを照合してもらい、「語りと絵本にかかっている絵との一致度」によって、被調査者の発話を「高一一致度」「中一致度」「低一致度」「一致度ゼロ」の4つのレベルに振り分けてもらった。日本語母語話者2名の判断が食い違ったところでは筆者と3名で話し合っ調整し、統一した基準になるように心がけた。

ここで言う被調査者の「語りと絵本にかかっている絵との一致度」とは、話し手の発話を第三者が絵本と照合した場合、その話し手の発話が、どのくらい絵本の内容を忠実に反映しているのか、反対に、どのくらい絵本から読み取れない話、

¹¹ ここでは日本語学習者、日本語母語話者それぞれの語りの全体的な傾向を概括的に捉えるために、パイロット的に行なった8名ずつの調査結果を示している。なお、表現と構造を具体的に論じる第3部、第4部では20名ずつの調査結果を分析している。

つまり絵本にかかれていない話を含むかを示す尺度である。具体的には、語りの表現内容の中で、絵本の場面を忠実に表現したものがどのくらいあるか、絵本の場面を基に加工した表現がどのくらいあるか、絵本の特定の絵と直接関係を持たない表現がどのくらいあるかによって、被調査者の発話を「高一一致度」「中一致度」「低一致度」「一致度ゼロ」の4つに分類した。

「高一一致度」表現というのは話し手の表現が絵本の絵と一致しており、第三者からみてもこの表現が絵本のこの場面を描いているとはっきり指し示すことができる表現である。例えば、「犬が車から捨てられた。」「海辺に一匹の犬がいる。」などの表現は、絵本のどの絵を再現しているのかを第三者が迷いなく探し出すことができる。

「高一一致度」表現と対立するのが「低一致度」表現である。それは話し手の表現が絵本の特定の場面と一致せず、第三者からみて、絵本のどの場面とも照合できない表現である。例えば、「犬はさびしいなあとと思った。」という表現は、捨てられた犬の内心を描いた表現であり、絵本のどの場面とも一致していないため「低一致度」表現と判断される。

また、実際の分類作業において、「犬がとぼとぼ歩いている。」のような「高一一致度」「低一致度」のいずれかに振り分けるのが困難な中間的表現があった。そこで「中一致度」という枠を設けた。「中一致度」表現というのは、「高一一致度」ほど明確に絵本の場面と照合できないが、「低一致度」ほど架空性が高くなかった表現である。

さらに、日本語学習者の語りにおいて、主に語りの冒頭部と終結部に現れ、ストーリーの背景の説明のような、絵本の内容と全く関係なく、ストーリーの展開を分かりやすくするために加えられた表現もあった。こうした表現は、ストーリーの内容に直接関係しない説明であるという点において上記3つのタイプと区別される。ストーリーの内容と直接関係しないという点から、「一致度ゼロ」表現として分類しておく。

以下では、日本語学習者と日本語母語話者の語りにおいてそれぞれの類の表現の占める割合について述べる。

4.3 量的に見る一致度の違い

表5からわかるように、日本語学習者と日本語母語話者は「高一致度」表現について大きな差はなかったが、「中一致度」表現が日本語母語話者に多く見られ、「低一致度」表現と「一致度ゼロ」表現が日本語学習者に多く見られるということが観察された。そのうち、「中一致度」表現は日本語学習者がほとんど使わないのに対し、日本語母語話者に12%も見られた。これは、日本語学習者がストーリーを語る時、絵本を忠実に表現するより、思い切った加工をするのに対して、日本語母語話者はあくまでも事実をありのまま伝えることを重点におき、加工した話を挿入するときでも、事実とかなりズレのある表現より、絵本の絵にある程度依拠する「中一致度」表現を好む傾向があるからではないかと考えられる。

表6で標準偏差を算出したところ、全体として、日本語学習者と日本語母語話者いずれも一致度に関する出現傾向はほぼ一様で、異常値だと思われるような数値は見当たらなかった。

【表5】日本語学習者と日本語母語話者の語りにおける一致度の比較

一致度	日本語学習者	日本語母語話者
高一致度	233 (48%)	188 (55%)
中一致度	8 (2%)	42 (12%)
低一致度	193 (40%)	95 (28%)
一致度ゼロ	47 (10%)	16 (5%)
	481 (全節数)	341 (全節数)

(%)は全節数に対する割合¹²

¹² 本研究では、情報量をより正確に知るために、文ではなく節を単位に集計を行った。述語とそれに対応する主語（省略されている場合も含む）があるとき、節として認定した。連用修飾節、連体修飾節、引用節、いずれも数に入れている。ただし、述語としての独立性が低く、文法化が進んでいるものは外した。たとえば、以下の例における「／／」内を1節として数えている。

例：彼は、あー、この犬は、あー、この犬は、あー、あー走ってきて、／あー、車にぶつかり、／あー、痛い、痛かったんですが、／でも、その車は、あー、この犬をよけて、／でも、後ろからの車とぶつかって、／事故になりました。[(CC5) 本文例 (11)]

【表 6-1】日本語学習者の語りにおける一致度の内訳

日本語学習者	高一致度	中一致度	低一致度	一致度ゼロ
CJ1	15	2	28	7
CJ2	20	2	41	8
CJ3	45	1	23	9
CJ4	28	0	9	4
CJ5	26	1	16	3
CJ6	34	1	36	8
CJ7	21	1	14	4
CJ8	44	0	26	4
標準偏差	11.06394	0.755929	10.97318	2.356602
平均値	29.125	1	24.125	5.875
合計	233	8	193	47

【表 6-2】日本語母語話者の語りにおける一致度の内訳

日本語母語話者	高一致度	中一致度	低一致度	一致度ゼロ
JJ1	13	2	4	1
JJ2	36	8	19	1
JJ3	20	4	13	5
JJ4	14	7	16	4
JJ5	32	5	9	1
JJ6	21	4	13	1
JJ7	24	6	12	1
JJ8	28	6	9	2
標準偏差	8.176622	1.908627	4.611709	1.603567
平均値	23.5	5.25	11.875	2
合計	188	42	95	16

では、日本語学習者と日本語母語話者は具体的にどのような表現を用いて絵本の内容を説明しているのか。また、どうして学習者に「低一致度」と「一致度ゼロ」表現が多く、母語話者に「中一致度」表現が多いという結果になったのか。さらに、個々の表現にはどんな違いが見られるのか。こうした疑問点を明らかにするために、以下では具体的な表現について考察する。

4.4 質的に見る一致度の違い

4.4.1 「一致度ゼロ」表現

日本語学習者の発話では、主に語りの開始部と終結部に、ストーリー全体がどのような意味を持っているかについて、自分なりの解釈やストーリーの内容の把握を示す主観的な表現が表れた。そうした発話は、絵本にかかれた内容を描いた表現ではなく、ストーリー全体についての日本語学習者の評価や意義づけを表すものであり、本稿の「一致度ゼロ」に分類されている。

4.4.1.1 語りの冒頭での違い

日本語学習者は話の冒頭で、次の(1)～(3)のように、自己の理解に基づいてストーリーに性格づけをし、絵本にかかれていない解釈を加える傾向があった。

例1 この絵本の中にかかれてたのはわたしがこう思ってますが、犬の復讐物語です。このような物語です。(CJ1)

例2 ○○さん、うんー、これはうんー、かわいそうな犬の話かもしれないと思います。(CJ5)

例3 今日は、あ、野良猫、野良犬、ごめんなさい、が、飼い犬になった、そのこと、物語を話した、たいと思います。(CJ6)

4.4.1.2 語りの結末における違い

日本語学習者の語りでは、次の例 4、例 5 のように、話の最後に犬の心情や物語に対する自分の感想を述べたり、ストーリーから教訓を引き出して終わるケースが見られた。

例 4 この犬は最後にこのように思いました。たぶん、愛も憎しみも最初は人を思う気持ちから生まれるんだって、自分は本当に間違えたと思った。このような物語だった。(CJ1)

例 5 この犬はまず人間に捨てられ、それから、人間だ、だまされ、自分をだましたのはあー、人間の中の、あー、純粋的な子供だというべきの子供です。うんー、あの一、悲しい物語ですね。もう終わりです。(CJ3)

一方、日本語母語話者には、語りの冒頭部と結末部における説明は見られず、語りの冒頭部では忠実に絵本の内容を再現し、直接ストーリーの状況を説明する表現が用いられている(例 6、7)。語りを終えるときも、感想などは交えず、事実だけを伝えて終わるケースがほとんどであった(例 8、9)。

例 6 何もない寂しいところで車から犬が捨てられてしまいます。(JJ5)

例 7 えーと、ある一匹の犬が飼い主から車の中から捨てられてしまいました。(JJ6)

例 8 そしてついには、その家族の息子だった男の子に出会い、アンジェールは、えーと、出会うことができました。おしまいです。(JJ4)

例 9 で、無事再会できて、終わりという物語です。(JJ7)

日本語学習者と日本語母語話者の語りを比較したところ、日本語学習者はストーリーの場面の再現よりも登場人物の内面を想像して描いているのに対し、日本語母語話者は絵本の内容を忠実に反映する表現するという語りの傾向の違いが考

察された。以下では、日本語学習者と日本語母語話者がそれぞれどんな表現を用いて絵本の内容を再現しているのかについて考察する。

4.5 日本語学習者の「低一致度」表現志向

日本語学習者はストーリーを展開していくにあたって、常に登場人物(犬を含む)の内面的な心理を内側から描いている。では、日本語学習者が具体的にどのような表現を使用しているのかについて、以下の4点から観察する。

4.5.1 感情形容詞・形容動詞

日本語学習者は「悲しい／怖い／痛い／うれしい／好き」などの感情形容詞・形容動詞を用いる。例えば、日本語学習者は犬が交通事故を起こした後、事故現場を振り向いて見ているシーン(絵本の25ページ)を犬の外見や動作ではなく、犬が「怖くなって」と犬の心理を直接描写し、犬の孤独で無力な感じを伝えている。また、犬が交通事故を起こした場面では、犬は「走ってきて」「車にぶつかり」と場面を再現した上で、犬を「痛かった」と描写している。「悲しい」「怖い」というのは絵本からは汲み取れない内面的な心情なので、「低一致度」表現であると考えられる。

例 10 うんー、この交通事故で多くの車が倒れて、人々は大変悲しかったです。
犬はこの場面を見て、うんー、怖くなって、えーと、うんー、ずっと、その、一時このところは大騒ぎしました。この犬はこれを見、振り向いて・・・
(CJ4)

例 11 彼は、あー、この犬は、あー、この犬は、あー、あー走ってきて、あー、車にぶつかり、あー、痛い、痛かったんですが、でも、その車は、あー、この犬をよけて、でも、後ろからの車とぶつかって、事故になりました。(CJ5)

このように、日本語学習者は犬を含む登場人物の内面的な感情を、感情形容詞・形容動詞を用いて、登場人物になりきって内側から描く傾向が強い。

4.5.2 心情動詞

日本語学習者は 5.2.1 で見た感情形容詞・形容動詞に留まらず、「がっかりする／後悔する／反省する／心配になる／惜しむ」などの心情を表す動詞を用いて、犬を含めた登場人物の心理を細かく描写している。次の例 12 では、犬が捨てられ、一生懸命車の後を追いかけるが追いつけない様子を再現描写した後、「とてもがっかりしました」と犬の心理を加え、それでも「やっぱり懸命に走っていました。」と犬の必死さを伝えようとしている。

例 12 一生懸命車の後につけられて、つけて、一生懸命に走りました。・・・
うんーエンジェルはとてもがっかりして、がっ、がっかりしていました。
やっぱり懸命に走っていました。うんーところが、うんー、いかに走り出しても及びつかないので、うんー、エンジェルはとてもがっかりして、とても悲しくて、(CJ2)

絵本の 25・26 ページでは犬が振り向きながら事故現場を見ている場面が描かれている。それを CJ6 は、犬が車の前から飛び出して交通事故を起こして、「車の人が降りて助けを求めている状況を見て」と述べる。ところが、その直後、「走っていった」や「事故を後にした」などと外面から分かる事実に言及せずに、「その犬は少し後悔しました」と犬になりきって内側から犬の心理活動を描き、「復讐」という CJ6 特有の解釈を示す。そして、「それから、この事故が拡大して、」と次の場面の事実の描写に移行している。

例 13 この犬が突然、草の中から飛んできて、車の、車の前から飛び出しました。車の人が降りて助けを求めている状況を見て、その犬は少し後悔しました。ただ復讐するためと思ったのに、こんなにひどい火事が起こったのは思いかけなかった事実です。それから、この事故が拡大して、・・・(CJ6)

似たような例はほかの学習者にも見られる。たとえば、CJ7 でも「後悔」という犬の内面を察する表現が観察される。

例 14 そして大騒ぎになって、人も、たくさんの人影がみえたアンジュール

はすごくびっくりしまして、そして自分の犯した罪に後悔しました。そして、うんー、その大きな道路を避けて、一人で、うんー、また旅に立ちました。(CJ7)

4.5.3 「と思う」

日本語学習者は「～と思う」という思考動詞を用いて、犬の心の動きを描くことが多い。その際、日本語学習者は「～たい」「～よう」といった表現を「と」の直前に置き、犬の希望や意志を示そうとする。こうした表現はすべての学習者に見られた。CJ1を見ると、まず、「でも、ある日突然、主人に砂漠まで連れ出されて、そこにおかされて、と、置かれて、置かれたまま、主人たちが帰ってしまった。」と犬が捨てられた場面を描いてから、次の場面に入る前に、

例 15 えーと、でも、それまで、その犬はまだきつと遊んでいるだと思って、
(CJ1)

と犬の心の動きを描いてから、「車を追いかけてさうとしましたが、」追いつかなかったとして、犬が車を追いかける場面に入っている。さらに、犬がなかなか車に追いつけず、いくら待っても飼い主が戻ってこないで、

例 16 そして犬は復讐しようと思った。(CJ1)

と犬の心境を描いてから交通事故が起きる場面に移っている。

また、人影を見た場面や浜辺でさまよっている場面の中でも、犬の心理を一つ一つきめ細かく描写し、犬はどう思って、どんな行動を取ったか説明している。

例 17 毎日、そこで何をしようかなと思って、でも自分の生き甲斐がどこにあるか全然分からなくて、そ、その状況の下、ある日、男の子に出会いました。(CJ1)

このように、日本語学習者の語りでは、多くの場面で、犬の行動の依拠となる心の動きがまず提示され、それから犬の行動が描かれるという手順を踏んでいる。

例 18 はその一つの典型である。

例 18 うんー、それから犬は、えーと、ずいぶん疲れていて、車が遠くのところへ行くのを見てました。うんー、それで、一人ぼっちになって、寂しくなりました。うんー、あー、でもやっぱり、犬はあの車を探しだしたいと思って、うんー、道に立って、車が来るのを待っています。(CJ4)

4.5.4 その他の感情表現

その他、日本語学習者の語りには、「～と信じる」「～に決める」などの決意を表す動詞や「～という気持ち」「～という衝動」などの感情を表す名詞表現で内面を描く傾向も見られた。

例 19 きっといつか主人が連れ戻そうとしてもう一度ここに来てと信じて、そこでずっと待ち続けていた。(CJ1)

例 20 そして、絶望、あー、絶望な犬は、あーあー、死ぬことを、に決めました。(CJ5)

例 21 そしてある日、日が暮れて、犬はあきらめて、家に帰ることにしました。(CJ8)

例 22 近づけ、近づきたいという気持ちが沸いてしようがなかった。(CJ1)

例 23 この犬は、自分が何か、すごい大きな事件を起こして、心から反省して、何かこれから、人々のために、うんー、自分の力を使いたいという気持ちが突然、沸いてきました。(CJ6)

以上のように、日本語学習者は「悲しい／怖い」などの感情形容詞・形容動詞、「がっかりする／後悔する」などの心情を表す動詞、「～と思う」のような思考動詞、さらには決意を表す動詞や感情を表す名詞を用いて、犬を含む登場人物の内面的な心理を内側から描く傾向が強かった。「4. 量的に見る一致度の違い」におい

て、日本語学習者の「低一致度」表現が日本語母語話者より多かった理由は、日本語学習者は主人公の内面を描く表現が多く、こうした表現が絵本の絵と一致しにくいため、低一致度表現として振り分けられるからである。

では、同じような場面を日本語母語話者はどのように描写しているのか。次は、日本語母語話者の語りにおける具体的な表現について見ることにしたい。

4.6 日本語母語話者の「高一致度」表現志向

日本語学習者とは対照的に、日本語母語話者は、絵本をもとに語る際にできるだけ場面を忠実に再現し、ストーリーの展開を場面描写で客観的に外面から捉える傾向がある。主に様態を現す「形容詞・形容動詞＋そう」の形である「悲しそうな顔／うれしそうな感じ／心配そうな目」や疑問表現「か」、オノマトペが用いられている。以下では具体的な表現について考察する。

4.6.1 「形容詞・形容動詞＋そう」

日本語学習者が形容詞や形容動詞を用いて犬の内面を描写するのに対して、日本語母語話者は「形容詞・形容動詞＋そう」を用いた「うれしそうな感じ／心配そうな目／悲しそうに見つめて」などの表現を使用し、犬を含む登場人物の内面感情を外観や表情から描くことが多い。

例 24 犬は一瞬ちょっとうれしそうな感じになるんですが、(JJ5)

例 25 心配そうな目で自分のほうを見てくれました。(JJ6)

例 26 悲しそうに見つめて、・・・また悲しそうにえーと、一人というか、一匹になってしまいます。(JJ7)

次の例 27 は事故後の犬の様子を描いたもので、「悲しそうな顔」と表現されている。同じ場面を描いた学習者の表現（例 10、11 参照）と比較してもその違いは一目瞭然である。

例 27 大騒ぎになってしまいます。犬は悲しそうな顔して、その自分が捨てられた場所からまた立ち去ってしまいます。(JJ5)

4.6.2 オノマトペ

日本語母語話者の大きな特徴の一つとして、場面を再現する際、オノマトペを用いて状況を説明することに重きを置く点が挙げられる。絵本では犬のひとりぼっちで歩いている様子が何度も繰り返しかかかれているが、日本語母語話者はその様子を捉え、「とぼとぼ」「うろうろ」などの表現を用いて再現している。

例 28 犬は街中の路地や、を一人とぼとぼと歩いていきました。(JJ2)

例 29 あたりをうろうろしています。・・・うろうろしていると、・・・本当に野良犬としてとぼとぼ、えーと、町中をさまよっています。(JJ5)

例 30 とぼとぼと一人で歩いていました。・・・結局また当てもなく一人、一匹でとぼとぼと当てもなく歩いていきました。(JJ6)

本研究では、日本語学習者の語りにもところどころ「形容詞・形容動詞＋そう」やオノマトペの使用が見られたが、傾向としては、日本語学習者は形容詞・形容動詞や感情動詞などの内面を直接描く表現を多用し、日本語母語話者は「形容詞・形容動詞＋そう」やオノマトペを用いて登場人物を外側から描こうとする様子が観察された。

また、「悲しそうな顔をしている」「とぼとぼ歩いている」といった表現は「高一致度」表現ほど絵本の絵と完全に一致するわけでもなく、「低一致度」表現ほど架空性が強いわけでもないので、第三者による絵本との一致度の分類においては「中一致度」表現として認定されることが多かった。つまり、「4. 量的に見る一致度の違い」において母語話者の「中一致度」表現の割合が高かったのは、絵本の絵を常に事実に基づいて、外側から描写していこうという日本語母語話者の語りの傾向に由来するのである。

4.6.3 「動詞＋てしまう」

日本語母語話者は語りの中で、犬の悲惨な遭遇や交通事故を伝える時に、「捨てられてしまいます」「置かされてしまいます」「大惨事になってしまいます」のような「動詞＋てしまう」を使い、取り返しのつかない事実であるということを感情表現を交えずに伝えようとする。この点においても、個々の感情を表す名詞や動詞によってストーリーの性格を伝えようとする日本語学習者の表現とは異なる。

例 31 車から追い出されてしまうんですね。で、そのまま、あの一、一匹だけ残されてしまって、(JJ1)

例 32 えー、道に飛び出したりしてしまって、で、でもやっぱり自分の家族の車を見つからずに、逆にこうちょう、交通渋滞とか、事故とかを起こしてしまっ結果になってしまっ、・・・(JJ3)

4.6.4 疑問表現「～か」

日本語母語話者は犬がどう思っているのかについて、犬の立場から描写しているのではなく、あくまでも、話し手には犬が寂しいと見えたという話し手の判断、つまり外側から心理を描いたという痕跡を表現に留めようとする。これは日本語学習者の「犬はさびしいと思って・・・」と犬になりきって内心を描写する思い切った表現と異なる語りの傾向である。

例 33 犬は寂しさからか、大空に向かって吠えました。(JJ2)

例 34 犬は飼い主の家に帰ろうとしたか、町中に入っていました。(JJ2)

例 35 その犬は車を飼い主の乗っている車と思ったか、その車に向かって走っていきます。(JJ5)

以上のように、日本語母語話者はストーリーを再現する際、「形容詞・形容動詞＋そう」の形を取る「悲しそうな顔」や「とぼとぼ」のようなオノマトペ、さら

には「動詞+てしまう」や疑問表現の「か」などを用いて、絵本の絵に基づいたストーリーの場面と一致度の高い表現によってストーリーを再現していることがわかった。

4.7 日本語学習者と日本語母語話者の語りの基本的特徴のまとめ

以上、明らかになった語りの特徴を日本語母語話者・日本語学習者別に示すと、以下のようなになる。

日本語母語話者は、

- ① 物語の性格付けや評価などを行わない。
- ② 事実とかなりズレのある「低一致度」表現より、絵本の絵に依拠した「高一致度」表現や事実と関連のある「中一致度」表現を好む。
- ③ 「悲しそうな顔」のような「感情形容詞・形容動詞+そう」、「とぼとぼ」のようなオノマトペ、取り返しのつかない事実を示す「～てしまう」や、外面からの心理描写を示す疑問表現「か」を多用し、登場人物の心理を外側から描く。
- ④ 登場人物の内面には深くは踏み込まず、犬を中心とした外面描写を軸にストーリーを展開する。

一方、日本語学習者は、

- ① 語りの冒頭部と結末部で物語の性格付けや評価を行う。
- ② 絵本の絵に依拠した「高一致度」表現に加え、事実とかなりズレのある「低一致度」表現を多用する。
- ③ 「悲しい／怖い」などの感情形容詞・形容動詞や「がっかりする」などの心情動詞、「～と思う」のような思考動詞、さらには決意を表す動詞や感情を表す名詞など、感情表現の使用が多い。
- ④ 登場人物になりきり、犬を中心とした内面の心理描写を軸にストーリーを展開する。

まとめると、絵本の語りにおいて、日本語母語話者は、絵本に描かれている内容を忠実に再現する描写を好み、心理描写をする場合でも外面からわかる描写に止めようとするのに対し、日本語学習者は、絵本に描かれた内容を脚色して大胆な内面描写を行ったり、絵本に描かれていない説明を語りの冒頭部と結末部に加えたりする傾向があることがわかった。

では、どうして日本語学習者の語りにこのような特徴が見られるのか。

その理由として、日本語学習者の心理的な要因と母語の文化的背景の影響という二つの要因が想定される。日本語学習者の心理的な要因としては、日本語学習者の母語でないために正確に伝えられる自信がなく、つい説明的になってしまうという要因と、もう一つは日本語学習者が発話する際に、できるだけわかりやすくするために、聞き手により多くの情報を提供し、その中から必要な情報を聞き手に選んでもらおうとしているという要因の二つが考えられる。一方、母語の文化的背景の影響としては、今回の調査対象である中国語を母語とする日本語学習者の文化・教育スタイルにより、中国語を母語とする日本語学習者ならではの語りのスタイルが形成されている可能性が考えられる。

日本語学習者に共通するストラテジーなのか、或いは中国語を母語とする日本語学習者ならではの特徴なのかについては、次の章で表現と構造を個々にみることによって明らかにする。

第 3 部 表現から見た語りの特徴

第 4 章では、日本語学習者と日本語母語話者の語りにおける基本的な特徴について分析した。その結果、日本語母語話者は登場人物の内面を深く踏み込まず、犬を中心に外面描写を軸にストーリー展開する傾向があることが分かった。それに対して、日本語学習者は登場人物、主に犬の内面の心理描写を軸にストーリーを展開する傾向にある。また、日本語母語話者は事実と関連ある絵本との一致度が高い表現を好むのに対して、日本語学習者は絵本の絵に依拠した「高一致度」表現に加え、事実とかなりズレのある「低一致度」表現を多用することが分かった。

では、日本語学習者は具体的にどのような表現を駆使し、絵本の内容を表現しているのか、それは日本語学習者とどのように異なるのか、また母語の影響が存在するのかどうか。

第 5 章では、日本語学習者の語りを日本語母語話者と比較することによって、日本語学習者の表現の特徴をより具体的に把握する。

第5章 実質語の使用から見た語りの特徴

本章でいう実質語とは、文の構成要素の中の主に内容的な意味を表す要素であり、主に名詞、動詞、形容詞、副詞が含まれる。それに対するのは、機能語、すなわち、助詞、助動詞、形式名詞、接続表現などの文型を構成する要素である。

本章では、主にストーリーの内容を直接表す名詞的表現の使用を比較することによって、学習者と母語話者が絵本の内容をそれぞれどのように捉え、どのような情報をどのような表現を用いて表しているのかについて、前者、すなわち実質語を通して考察することを目的とする。

5.1 日本語学習者の表現に関する先行研究

4コマ漫画或いは6コマ漫画、アニメーションを調査材料にし、日本語学習者と母語話者の談話を分析したものに、栃木(1989)、田代(1995)、渡邊(1996)、増田(2000)、庄司(2001)、渡辺(2003)などがある。これらの研究は、接続表現、指示表現、視点、語彙選択などの観点から日本語学習者と母語話者の談話を比較分析し、中・上級日本語学習者の文章或いは会話の特徴を、それぞれ固有の角度から明らかにしたものである。ここでは、語彙選択の観点から学習者と母語話者と学習者の違いを論じたという点で本研究にとって示唆的であった庄司(2001)に触れておきたい。

庄司(2001)は、語彙選択の側面から母語話者と学習者の口頭表現能力を比較したものである。庄司(2001)は、中国人学習者を中心にアジア圏の学生10名と母語話者10名に対して6コマ漫画と一続きの絵を2種類用意し、口頭で話してもらうという調査方法でデータを集めた。分析方法としては、発話データを動詞、名詞、副詞、連体詞、助動詞、格助詞、接続助詞、副助詞、成句と分けて数を数えた。主に、発話文の長さ、語の選択の質、活用語の出現頻度と文脈の適切性、結束性の面から考察し、学習者と母語話者の語彙選択について比較した。その結果、母語話者に比べて学習者の発話は文の構成が単純で、1文の長さが比較的短い。動詞と助詞の使用に誤用が多く、既習語の語義を恣意的に拡張して使用する傾向があることがわかったと報告されている。

庄司(2001)は語選択とテキスト全体の適切性を判断する際には母語話者8名以

上が使用した語を「必須語」、母語話者 5 名以上が選択した語を「重要語」と判断し、それを「ストーリー・テリングのためのキーワード」としている。つまり、母語話者の語の選択を基準にして差をつけているのである。

学習者をいかに母語話者に近づけるかという日本語教育の観点から考えると示唆的であるかもしれないが、本研究の目的である学習者と母語話者それぞれの表現的特徴を捉える捉え方にはなじまない。そのため、本研究では母語話者を基準とせず、学習者と母語話者が同じ内容を表す際どのような語彙を選択しているのかをそれぞれ見ていくことにする。

また、庄司(2001)は被調査者の選定として、被調査者である学習者が全員日本語能力試験を受けたものの、全員合格したわけではないとしている。その点も、学習者のレベルを明確にした本稿とは異なる点である。

5.2 日本語母語話者との比較から見た日本語学習者の実質語選択の特徴

以下では、日本語学習者と日本語母語話者の語りにおいて、それぞれどのような名詞的表現が用いられているのかについて異なり語数を検出し、それぞれの使用の傾向を探る。

まず、表 7 でわかるように、登場人物についてみると、「犬」、「車」は日本語学習者、日本語母語話者それぞれ 20 名全員に用いられているが、日本語学習者のうち 6 名が「犬」に名前をつけている。それに対して日本語母語話者の犬に対する呼び方のバリエーションが比較的少なく、2 名以外ほとんど「犬」で通している。

また、日本語母語話者が犬の飼い主のことを「飼い主」と呼びつけるのに対して、日本語学習者のうち 15 名が「ご主人」「主人」「主」という言い方で飼い主のことを表現している。一方、日本語母語話者には 2 例しか見られなかった。日本語学習者のこのような呼び方は母語の影響かどうかは、次の節で検証する。

日本語母語話者は事故を起こした車について一貫して「車」と再現しているが、日本語学習者は「車」以外に「運転者」が 4 例、「運転手」7 例あった。これはおそらく日本語母語話者と日本語学習者のそれぞれの視点の違いを表しているのではないかと考えられる。

【表 7】日本語学習者と日本語母語話者の登場人物における名詞的表現¹³

カテゴリ	具体的な表現	CJ	JJ
犬について	犬	20	20
	飼い犬	4	1
	野良犬	1	4
	ワンちゃん	1	0
	エンジェル	1	0
	ハチ公	1	0
	しんちゃん	1	0
	ワンワン	0	1
	アンジュール	2	1
	放浪者	1	0
	小計	32	27
飼い主について	飼い主	6	10
	ご主人	3	1
	主	3	0
	主人	9	1
	小計	21	12
車について	車	20	20
	運転手	7	0
	運転者	4	0
	小計	31	20

上記以外の登場人物には、日本語学習者と日本語母語話者に以下のものが登場している。

- (1) 妻 (CJ1、JJ0)¹⁴ 夫婦 (CJ1、JJ0) 家族 (CJ3、JJ3)
- (2) 影 (CJ2、JJ1) 人影 (CJ3、JJ5) 恋人 (CJ3、JJ0)
- (3) おじさん (CJ4、JJ3) おじちゃん (CJ1、JJ0) 男性 (CJ0、JJ1) 知り合い (CJ1、JJ0)
- (4) 女の子 (CJ1、JJ3) 男の子 (CJ4、JJ5) 子ども (CJ7、JJ4) 少年 (CJ0、JJ5) トム (CJ0、JJ1)

¹³ 数字は異なり語数である。被調査者である日本語学習者と日本語母語話者共に 20 名である。

¹⁴ () の中の CJ は日本語学習者、JJ は日本語母語話者である。それぞれの後ろの数字は異なり語数である。以下同様。

これはストーリーの人物の登場順で並べたものである。ここでは、(2)と(4)について詳述する。

(2)は交通事故が起きたあと、犬がほかの場所へ移動する途中でみて光景である。絵本の中にははっきりかかれていなく、薄黒い影にしか見えないのである。それを日本語母語話者は「影」「人影」と忠実に描写しているのに対して、日本語学習者のうち3人が「恋人」と断定している。

例1 それで、海のところへ、あの一、海のところへ行きました。うーん、海辺に、あの一恋人がさん、散歩している恋人を見ました。(CJ12)

例2 それで、まあ、その後も、その辺うろろうろ放浪していると、人影が遠くに見えたので、もしかしたら飼い主かもしれないと思って、近づいていってみるんですけど、なんか違う。(JJ11)

更に絵本の最後の出会いのシーンでは、(4)で示したように、日本語学習者と日本語母語話者がそれぞれ「女の子」「男の子」「子ども」とストーリーの結末に出てくる子どものことを描写しているが、日本語母語話者は「少年」という名詞を5名が使用しているのに対して、日本語学習者は1例も見られなかった。

例3 希望を持たないまま歩いて、急に、ある子どもが、あわれ、あわれ、現れました。その子どももじっくりとその犬を見ていました。(CJ17)

例4 そこには、一人の少年がいました。その少年はこの犬がやったことも、どういう犬かもなにも知らなかったけれど、「こっちおいで」とやさしく言ってくれました。犬は最初は疑っていましたが、その少年の笑顔とかに引かれて、近づいてしまいました。(JJ17)

以上は登場人物に焦点を当て、どのような名詞を用いて登場人物を指し示しているのかを考察したが、以下では、ストーリーの展開そのものと関係が薄い絵本自体についての紹介或いは説明的な語句にどのような名詞的表現が用いられているのかについてみてみよう。絵本に対する説明であるため、語りの開始部と終結部に現れる表現である。

(5) 物語 (CJ11、JJ3) 話 (CJ3、JJ8) 絵本 (CJ6、JJ0) 本 (CJ1、JJ3) ストーリー (CJ4、JJ0) ラブストーリー (CJ0、JJ1) 映画 (CJ2、JJ0)

(6) 作者 (CJ2、JJ0) テーマ (CJ1、JJ0) 題名 (CJ0、JJ1) 場面 (CJ1、JJ3) シーン (CJ0、

JJ2) 内容 (CJ0、JJ2) 理由 (CJ0、JJ1) マス (CJ0、JJ1) 結末 (CJ1、JJ0) ハッピー
エンド (CJ0、JJ2)

(7) 皆さん (CJ1、JJ0) 読者 (CJ1、JJ0)

(5)、(6)、(7)から分かることは、日本語学習者は語りの冒頭部で絵本についての説明を加える傾向があるため、(5)では、「物語、話、絵本、ストーリー」などの名詞的表現が用いられたのである。一方、日本語母語話者は、語りの終結部に物語の締めくくりとして、「という+話」を用いる傾向があったため、「話」が8名に見られたのが特徴的である。

例 5 そうですね。これはかなり悲しい物語だと思います。えーと、この犬は飼い主を、捨てられてしまいました。(CJ9)

例 6 そして犬は、自分を受け入れてくれる人に出会って、うれしそうにまあ、近寄って行って、子どもと、えー、子どもと仲良くして、なっついて終わりという話です。(JJ15)

一方、(6)で分かるように、日本語母語話者は「マス、シーン、内容」などの語句が目立つ。これは日本語母語話者がストーリーを再現する際に、物語に入り込むことなく、常に外側から客観的に、淡々と語るからではないかと考えられる。

例7 えーと、最初に、最初の場面というのは、えーと、車が一台、えーとおそらく砂漠を、にやってきて、そ、そこ、その道、そこでですね、飼い主らしき人がですね、犬を捨てるというシーンです。(JJ20)

例 8 で、その最終のマスでは、違う町にたどり着いて、路地裏でちょっとゴミをあさったりして、町の人に追い払われたりして、ちょっと惨めな、になったりするんですが、そこで、町のはずれで、あの一、一人の子どもに出会うんです。(JJ10)

次では、ストーリーの展開に焦点を当て、日本語学習者と日本語母語話者は実際の物語の場面をどのような語句で表現し、どこに注目して語っているのかについてみてみよう。以下は交通事故の場面を語る際に用いられた名詞的表現を数えた異なり語数である。

日本語学習者と日本語母語話者に共に用いられたものには、

(8) スピード (CJ6、JJ2) 方向 (CJ6、JJ2) 現場 (CJ2、JJ3) 状況 (CJ6、JJ1) 交通渋滞 (CJ2、JJ1) 渋滞 (CJ1、JJ1) 急ブレーキ (CJ1、JJ3) ハンドル (CJ1、JJ2) 道端 (CJ3、JJ2) 道 (CJ8、JJ13) 途中 (CJ2、JJ3) 事故 (CJ6、JJ13)

などがある。

一方、日本語母語話者にあつて、日本語学習者に出なかった表現は以下の通りである。

- (9) 対向車 (CJ0、JJ1) 車道 (CJ0、JJ1) 端 (CJ0、JJ1) 玉突き事故 (CJ0、JJ2) ブレーキ (CJ0、JJ1) タイヤ (CJ0、JJ1) 火の手 (CJ0、JJ2) 場 (CJ0、JJ7) 惨事 (CJ0、JJ1) けが人 (CJ0、JJ1) 救急車 (CJ0、JJ2) 逆方向 (CJ0、JJ1) 煙 (CJ0、JJ1) 正面衝突 (CJ0、JJ1) 至近距離 (CJ0、JJ1) 大火災 (CJ0、JJ1) 火災 (CJ0、JJ1) 炎 (CJ0、JJ1) 反対側 (CJ0、JJ1)

(9)から分かるように、日本語母語話者は実際何が起きたのか、事故の現場をしっかりと描写している傾向にある。また、(8)からは、日本語母語話者の語彙はシンプルで、道 (CJ8、JJ13)、事故 (CJ6、JJ13)」などの単語を好んで用いている。

また、(9)で注目すべき単語は「場」である。日本語学習者0名に対し7名もあつた。実はこれは全て「その場」という使い方で用いられているのである。具体的にどのように用いられているのか、例で示す。

例9 まあ、犬も申し訳なく思っていました。そして、その一、まあ、犬はその場からちょっと逃げるようにして、えー、その、この道路、捨てられた道路から離れていくんですが、(JJ9)

例10 で、犬はこれはまずいなと思って、見てたら、どんどん事故がえらい大事故になっていて、で、これはどう、どうしたものかと思って、とりあえずその場を逃げ去るわけです。(JJ10)

例11 この犬は最初はやってやったっていう感じでその場から離れるんですけど、ちょっとその場から離れてみると、すごい炎やすごい人、警察などがたくさん来て、大惨事になってました。(JJ13)

このような表現は日本語学習者には見られなかった。では、日本語学習者は交通事故の場面でどのような表現を使用しているのか。以下は、日本語学習者にあつたが日本語母語話者には見られなかった表現である。

- (10) 交通事故 (CJ3、JJ0) 追突事故 (CJ1、JJ0) 自動車事故 (CJ1、JJ0) 高速道路 (CJ3、JJ0) 事件 (CJ3、JJ0) 犯罪者 (CJ1、JJ0) ブレーキ (CJ2、JJ0) 怪我 (CJ2、JJ0)

体 (CJ1、JJ0) 傷 (CJ1、JJ0) 行動 (CJ1、JJ0) 儀式 (CJ1、JJ0) 流れ (CJ1、JJ0)
速度 (CJ1、JJ0)

などがあった。これらの表現は(9)とガラッと変わって事故のことを表現していると思いきや、事故と関係ない表現も入っており、一見表現だけではどんな展開になるのか想像が付きにくい印象を与える可能性がある。

日本語学習者の表現をまとめると、以下の①から⑨の傾向にあるといえよう。

- ① 日本語学習者は、場所を表す名詞を日本語母語話者より多用しており、ストーリーの内容を表すときにそれがどこで起きた出来事なのかを説明する傾向が強かった。

例 12 そして、そのあとは、まあ一、たぶん田舎に行きました。それは、なんか、稲があるかもしれませんという感じです。でもそのあとは、また、道とか、道に行きました。(CJ9)

例 13 車の中でずっと振り、返して、そのワンちゃんをみ、見ていました。(CJ14)

- ② 日本語母語話者より言及する対象が多い。これは語りの内容を豊かにする反面、わかりにくさにもつながる要因の一つだと考えられる。以下の例 14 では絵本のある画面で描かれている内容を一度に伝えようとしているが、背景の説明が整理できていない印象を与える。

例 14 やはり、あ、行くところ、あ一、行くところがない犬はあの一、悲しそうに歩いていました。そのときは、すごい風が吹いて、空には黒い黒い雲、あ一、うん一、広い空き地に積もった雪には一行の犬の足跡が残っていた。(CJ3)

- ③ 日本語学習者は語りの際、犬への名付けが 6 例見られたが、日本語母語話者には 1 例しか見られなかった。

例 15 えーと、昔エンジェルと言う名前の犬がいました。(CJ2)

例 16 え一、ワンちゃんがその車をずっと追いかけて、あきらめ、諦めませんでした。(CJ14)

例 17 この絵本の、このストーリーの名前は、え一、恩を返す犬、というものだ。というものです。犬の名前はハチ公です。(CJ19)

- ④ 日本語母語話者に比べ、日本語学習者は、感情を表す形容詞、動詞の名詞形、及び形容詞からできる「形容詞語幹+み」のような語彙を使用することが多い。日本語学習者にも日本語母語話者にも形容詞の使用として「悲しい」「悔しい」などの例が同じように見られたが、それを名詞化する例は日本語学習者のほうが多かった。

例 18 うんー、この交通事故で多くの車が倒れて、人々は大変悲しかったです。犬はこの場面を見て、うんー、怖くなって、えーと、うんー、ずっと、その、一時このところは大騒ぎしました。この犬はこれを見、振り向いて・・・(CJ4)

例 19 その時は、私はあの一、なんと、切ない犬でしょう。ってという感じと共に、人間への、今までない、人間への恨みを感じまし、感じてしまいました。(CJ12)

例 20 しかし、急に、悲しみもその子どもからもあわ、あわれました。なぜかという、その子どもはこの犬を、家に連れて帰ることもできないからです。(CJ17)

- ⑤ ストーリーの性格を表す語に、日本語母語話者にも見られる「事故」「大惨事」などの客観的に見て取れる語以外に「復讐物語」や「捨てられる運命とその運命を破るために努力した犬の話」など主観的な判断を示す語を使用している。

例 21 この絵本の中にかかれてたのはわたしがこう思ってますが、犬の復讐物語です。(CJ1)

- ⑥ 次の例は全てストーリーの冒頭に出現した文であるが、ストーリーの内容に対する話し手の理解や解釈、注釈である。このような発話は日本語母語話者には見られなかった。

例 22 まず、言っておきたいのですが、この絵本はたぶん、私の理解がちょっと間違っているかもしれないです。(CJ10)

例 23 うんー、あの一、この映画の主人公は、あの一、人というより、あの一、犬ですから、視点はあの一、犬の目から世界を見る、つまり犬のあの一、第一人称が犬と設定すれば、ストーリーがよりあの一、生き生きするという感じがあると思います。(CJ12)

例 24 えー、犬は、あ、動物の中で、犬はその、一番忠誠心のある動物と言われていますが、えー、これから私が話したいその物語が、あの一、犬に関する物語です。(CJ14)

例 25 えーと、この話はえーと、捨てられる運命とその運命を破るために努力した犬の話です。(CJ16)

- ⑦ 上級或いは超上級と見られる日本語学習者であっても母語である中国語の影響を受けたものとして考えられる語句の使用が見られた。これは特に場所を表す名詞によく見られた特徴である。

例 26 海の、ところに行きましたけど、うんー、泥だら、うんー、うんー、水面の上に映した泥だらけの自分の影を見て、昔のことを思い出しました。(CJ2)

例 27 そうですね。あの一、あの一、あ一一、あの日犬が自分の主人にあの一、車の中から捨てられた。(CJ11)

中国語では、場所を表すときに「名詞＋方位を表す名詞」を用いる場合が多い。例えば、日本語では、「犬は車から捨てられた。」と表すところ、中国語では「一只狗被从车里扔了出来。(一匹の犬が車の中から捨てられました。」と表す。例 26 と例 27 はまさにその例であり、中国語母語話者のデータでも同様な例が見られる。(例 28 参照)

例28 在一开始这只狗被从一个疾驰的车里扔了出来。(CC7)
(はじめのときは、ある犬が猛スピードで走っている車の中から捨てられた。
(作者訳、以下同様))

日本語学習者のこのような傾向について、張(2001)は中国語を母語とする日本語学習者が「の上」「の中」を過剰使用する傾向にあると指摘した上で、それは学習者の母語である中国語と目標言語である日本語の性格の違いから生じたものであると分析している。その分析によれば、「の中」の基本的な用法は空間名詞のあとについてその空間名詞が表す空間内部或いは内側といった意味を表す。しかし、日本語には使っても使わなくてもよい「の中」というものが存在しており、もし空間の内部・内側と外部・外側とが明確に対立している場合は、「の中」の使用は必ずしも必要ではない。さらに、その、使っても使わなくてもよいというのは、「の中」がなくても名詞と動詞の意味関係などによって、空間のイメージが十分理解されるためではないかと指摘している。

例 27 の「車の中」において、「車」は「の中」を使用しなくても空間のイメージが十分理解できる名詞であるといえよう。しかし、中国語では基本的に例 28 のように、日本語の「中」に相当する「里(li)」を使用しなければならない。

本研究では、また以下のような例も見られた。

例 29 啊，有一天，它在这个，马路，马路的旁边走，就像往常一样。(CC19)
(あ、ある日、犬はあの一、道路、道路のそばを歩き、いつものように)

例 29 の「马路的旁边」は「道路のそば」という意味である。日本語学習者には同じよう表現が見られた。

例 30 で、あの一、そして、あの一、道のそばにあるなんか道印のようなものを、の
ところを私はウンコをした。(CJ12)

- ⑧ 日本語母語話者は「カフェ／海岸／草原／夕日」などの名詞を用いて、しっかりと場面を設定しているのに対して、日本語学習者は「心の傷／罪／いたずら／神様のいたずら／憎しみ／生き甲斐／衝動」といった犬の心理に関わる名詞を使用している。

5.3 日本語学習者の実質語選択に対する母語の影響の検証

5.2 では日本語学習者は「普通名詞＋方位を表す名詞」という形を好んで使用するの母語である中国語の影響によるものではないかと分析したが、中国語母語話者の語彙選択について簡単に述べておきたい。

まず、登場人物について、中国語母語話者は次のような表現を使用している。

(1) 犬について：狗，流浪狗，宠物狗，狗狗，小狗，我，Lucky

日本語学習者は冒頭から犬に名前をつけた例が 5 名あったが、中国語母語話者には 1 例しか見られなかった。(例 32 参照)

例 31 一开始这狗不知道自己被抛弃了。有一天，那个主人带这狗去一个地方。(CC1)
(最初は、この犬はまだ捨てられたとは知らなかった。ある日、あのご主人が犬をあるところに連れて行った。)

例 32 故事的主人公是一只狗，狗的名字叫做 Lucky。它是一只流浪狗。(CC2)
(ストーリーの主人公は一匹の犬です。犬の名前はラッキーといいます。ラッキーは一匹の流浪犬です。)

ここでいう「流浪狗」というのは「流浪をしている犬」という意味であり、またそれと対抗するような形で「宠物狗」という言い方が使用されているが、「ペットである犬」という意味として、直接名詞として存在する。それ以外に、中国では「野狗 (野良犬)」「家犬 (飼い犬)」などと犬の種類を分ける場合がある。

例 33 嗯，那个，有一只小狗原来是，哦，一家人养的宠物狗。(CC14)
(うーん、あの一、一匹の犬がいたんだけど、もともとある家族に飼われていたペットの犬だったの。)

また、犬以外の登場人物において、以下のような名詞が用いられた。そのうち、日本語学習者に共通する名詞として、「恋人」「情侶」がある。この 2 語とも「恋人同士」という意味である。

(2) 犬以外の登場人物について：一家人，车，汽车，司机，警车，救护车，人影，小孩，清洁工，工人，清洁工人，主人，男主人，女主人，夫妇，小女孩，小男孩，老人，老

头儿, 情侣, 恋人

中国語母語話者が日本語学習者と共通して使われた語彙のうち、もっとも特徴的なのは「主人」である。「主人」は日本語と中国語の同形語であり、意味も同じである。しかし、前述の表 7 のように、日本語では「飼い主」が使用されることが多く、「ご主人」「主人」という言い方を用いた日本語母語話者はわずか 2 例であった。それに対し日本語学習者は「飼い主」と使用したのが 6 例で、「ご主人」「主人」「主^{ぬし}」を用いた例が 15 例もあった。一方で、中国語では「飼い犬」に対する人間の言い方は「主人 (zhu ren)」しかないため、中国語母語話者は全員「主人 (zhu ren)」という中国語を使用している。

日本語母語話者は海辺に出現する「影」について、「人影が見える」にとどまったのに対して、日本語学習者はそれを「恋人」と明示した。日本語学習者と同様に、中国語母語話者も「恋人」という名詞を用いた例が 3 例見られた。

例 34 嗯, 于是我来到了这个海滩。然后看见一对恋人。然后他们似乎也是在走向死亡。
(CC4)

(うーん、それで、私はこの海辺にやってきた。恋人同士が見えた。彼らは死亡へ向かっているようでした。)

更に、中国語母語話者の発話には、以下のような場面設定に用いられる場所を表す名詞表現が観察された。これらの場面描写の語彙から、中国語母語話者の語りもしっかり場面設定が行なわれていることがわかる。

(3) 場所を表す名詞について：路边, 山川, 河流, 田野, 村庄, 旷野, 城市, 桥, 河, 小巷, 海滩上, 天, 海, 大海, 海滩, 城里, 宾馆, 餐馆, 墓碑, 郊外, 沙漠, 荒野, 山顶, 街边, 沙丘, 胡同, 居民区

例 35 嗯, 后来它来到了一个应该是类似于居民区的地方吧。(CC11)

(えー、で、犬は住宅地のようなところに来ました。)

例 36 然后, 它看见了很多很漂亮的云彩。然后是五颜六色的。也看见了很多山川。完后走过了河流, 走向了一片广袤的田野。然后它突然看见了一片小村庄。(CC12)

(で、犬はたくさんきれいな雲をみた。色とりどりでとてもきれいでした。また、たくさん山や川をみた。そして川を渡り、広い野原へ向かった。それで村落が見つけた。)

上記以外に、名詞に限りないが、犬の心理についての描写には以下の語彙が使用されて

いる。

- (4) 犬の心理について：伤心，幸福，希望，低落，畏惧，悲伤，报复，孤独，孤单，幸运，兴奋，失望，惊恐，开心，惊慌

例 37 然后它又继续它孤独的旅程。一直走。最后走到了城市里。(CC5)

(で、犬はまた自分の孤独な旅を続けた。ずっと歩いて、最後にある町に着いた。)

例 38 狗并没有追上去。它只好失望地停了下来。(CC7)

(犬は追いませんでした。犬は仕方がなくながっかりして止まりました。)

例 39 但这时候它已经觉得很伤心，就觉得一方面就是没有人去，没有人肯要它。(CC9)

(だけどこのとき犬はとても悲しかった。誰も彼を受け取ろうとしないからです。)

中国語母語話者に、「孤独、报复、悲伤、凄凉、害怕」などの心理描写も出てきたが犬になりきって説明しているのではなく、「可能是／好像／看起来」などのあくまでも自分の判断であることを強調する、日本語の「ようだ、らしい、みたい」に当たる客観的な描写があった。

例 40 但是到最后这只狗它需要的或者是食物吧，或者是骨头，这个小孩儿好像身上并没有带。(CC5)

(でも、最後にこの犬が必要なのはたぶん食事かな、或いは骨かもしれない。この子どもは持ってなかったみたい。)

例 41 嗯，然后那个小狗就开始就是跑得很累了嘛，也还是低头闻气味那样子。好像想顺着那一路那样找下去，直到找到那辆车那个样子。(CC6)

(えーと、で、あの犬は走ってとても疲れたけど、やっぱり下を向いてひたすら匂いを臭っているようだった。道を沿ってずっとあの車を探したいみたい。)

このように、中国語母語話者の語りには、日本語学習者と似た特徴もあれば、日本語母語話者と共通する特徴も存在することがわかった。逆に言えば、日本語学習者の語りを見ると、確かに「水面の上」「車の中」「主人」「恋人」のような母語である中国語の影響が見られる日本語の表現を使用する傾向もあったが、日本語学習者は主人公の内面を描く表現が多く、絵本どりの一致度が低いという点においては、必ずしも母語の影響とは言い切れないのである。中国語母語話者も心理描写を表す語句を使用した。日本語の「ようだ、みたい」に当たる「好像」などを使用し、あくまでも物事の外側から描写する傾向があった。

5.4 表現選択の特徴のまとめ

本章では、日本語母語話者と日本語学習者の語りを比較することによって、日本語学習者の実質語選択における特徴を考察した。更に、中国語母語話者の語りも加えて検討し、母語の影響について検証した。その結果を以下の表で示す。

【表 8】 語彙選択における 3 者の比較

	日本語学習者	日本語母語話者	中国語母語話者
①場所を表す名詞	多い	多い	多い
②言及する内容の量	多い	CJほど多くない	— ¹⁵
③犬に名前をつける	多い	なし	1例
④犬の心理を表さす語	多い	CJほど多くない	多い
⑤主観的判断を表す語	あり	なし	あり
⑥内容に対する解釈説明	あり	なし	なし
⑦「ようだ／好像」を用いる外面描写	なし	あり	あり

母語の影響として認められたのは、

- ① 「主人」「恋人」などの同形語の使用
- ② 「車の中」のような「名詞＋方位名詞」の使用

の 2 点であった。

¹⁵ 言語が異なるので、ここでは比較を行わなかった。

第4部 構造から見た語りの特徴

第4部では、語りの構造という観点から学習者と日本語母語話者、中国語母語話者の語りの開始部と終結部に注目し、それぞれどのような情報がどのように語られているのかについて分析する。さらに、ストーリーをどのように展開しているかという観点から接続表現に注目し、展開における相違点について考察する。

第 6 章 語りの開始部と終結部における特徴

本章では「語り」の冒頭部と終結部に焦点を当て、日本語学習者と母語話者がそれぞれ「何を」「どのように」語っているのかについて、情報と表現の観点からその言語的特徴を探る。

6.1 語りの構造に関する先行研究

李(2000)は親しい友人同士の1対1の会話をデータに、「過去に発生した出来事の報告」を取り出し、これを「物語」と定義し分析している。李(2000)によれば、語り手が「物語」を開始するための言語行動として「話を変える表示をする」「話をするための許可をほかの会話参加者に求める」「話をしようとする意欲をほかの会話参加者にアピールする」「ほかの会話参加者の興味を引く」の4種類に分けて分析しているが、その中でも「ほかの会話参加者の興味を引く」という項目には以下の4種類の言語行動が挙げられている。

- 1 出来事の結末を先に言い出す
- 2 出来事発生当時の気持ちを表す
- 3 出来事から得た結論を提示する
- 4 物語の価値を主張する

また、「物語」を終了するための言語行動として以下の6種類が挙げられている。

- 1 出来事の結末を示す
- 2 出来事発生当時の気持ちを示す
- 3 出来事・物語の終了を示す
- 4 出来事の題目を示す
- 5 出来事から得た結論を述べる
- 6 出来事に対する感想・意見を述べる

本研究の研究対象も李(2000)と同じく1対1の談話データではあるが、データの質から見て「会話」というよりも語り手と聞き手の役割が安定しており、「独

話」に近い。その点からいえば、上記の「ほかの会話参加者の興味を引く」で挙げられた4種類の言語行動が本研究の目的である冒頭部における表現的特徴を探るのに示唆的である。また、本研究では文字のない絵本を語りの材料として用いたため、語られる内容が一定であり、より言語的な特徴がつかみやすいと予測される。

増田（2000）は日本語学習者と母語話者が書いたストーリー・テリング文¹⁶を比較し、文章の展開のテクニックの違いに注目している。結果として、母語話者はストーリーの全体的構造上の内容転換部分で「実は・・・たのだった」「結局・・・た」などの因果関係を表す形式を用いて「特定の言語表現の使用が見られた」としている。一方、学習者はユニットの移行とユニットの内部の両方において接続助詞、接続詞に大きく依存していると結論付けている。増田（2000）がテキストの構造的枠組み内で、ストーリー展開の各ユニットの役割を果たすために、書き手がどのような言語表現を使用したのかについて観察したという点では本研究にとって示唆的である。しかし、テキストの質の面からストーリーの構造を直接的に出来事の展開を支えている「方向づけ」「込み入った出来事」「結果、解決」という三つの枠組みで分析した点で本研究のストーリーの構造の分け方と異なる部分がある。

語りの終結部の言語的特徴について分析した先行研究には俵山（2007）がある。俵山（2007）は母語話者と非母語話者に4コマ漫画を説明させ、その終結部の言語的要素が用いられているのかについて分析している。日本語母語話者の語りには「なに使ったかと言えば」「ボクシングのために使ったんじゃなくて」というような談話の焦点を聞き手に伝達する注釈節と「買ったという落ちになっています」のような「という+ことがらを表す名詞」で終える特徴が見られたと報告されている。また、このような言語的な特徴は母語話者のほうがバラエティー豊かに用いられているのに対して、非母語話者にはほとんど用いられず、それが終結の意図や落ちの伝達の失敗につながっている可能性があるとして指摘している。

俵山（2007）では、用いた談話データが語り手と聞き手の役割がほぼ固定されて

¹⁶増田（2000）はすでに誰かによって書かれて（語られて）存在している「物語」や「昔話」などの語と区別するために、「ストーリーテリング文」という語を「ある出来事のプロセスを説明したひとまとまりの文章」と定義しているが、本研究ではいわゆる「語り」と同じものとみなす。

いて、より独話的という点で本研究と質的に似ており、母語話者の「という＋ことがらを表す名詞」で談話を終了するという表現的特徴が本研究においても観察されるなど本研究にとって示唆的ではあるが、非母語話者の言語的特徴についてあまり言及されていなかったことや終結部におけるストーリーについての感想・意見を分析対象から除いた点において本研究の分析範囲と異なっている。

6.2 日本語母語話者との比較から見た日本語学習者の語りの構造

6.2.1 分析方法

まず、本研究でいう「冒頭部」と「終結部」の認定方法について説明する。

本研究において「どこまでを冒頭部・終結部と認定するのか」という問題が分析方法に大きく関わるため、ここでは談話の構成要素について説明することにする。

Labov(1972)によれば、物語は以下の6つの構成要素からなっている。

要旨・導入部：話の最初に、何についての話なのかを聞き手に伝える

「これはある犬の物語です」

「これから犬が飼い主に捨てられた話をします」

設定・方向付け：誰が、いつ、どこで、何を（していたか）

「ある日、犬は年を取ったため飼い主に連れられて」

「〇〇年の春、犬は飼い主一家とドライブに出かけた」

出来事：起きた事件は具体的に何なのか

「犬は途中で騒ぐので捨てられてしまった」

「犬が飼い主の車をずっと追っかけました」

評価：話し手の気持ちはどうだったのか、話の意味は何なのか

「この犬はかわいそうですね」

「飼い主が野良犬になってしまいました」

解決・結果：事件が最高潮を迎えた後、結局どうなったのか

「犬は自分の飼い主と再会できました」

「犬と女の子は幸せに暮らしました」

結語・終結部：話の最後の締めくくりのことば

「以上です」

「これで終わりです」

本研究は上記の先行研究を踏まえて、談話データの枠組みを機械的に絵本のシーンを基準に決めることにした。絵本の最初のページは犬が車から捨てられる場面である。データの中からこの場面について話していると思われる部分とそれ以前の語り手のすべての発話を「冒頭部」と認定し、語りの最初にどの要素が現れているのかについて考察する。すなわち、本研究における「冒頭部」には先行研究で言及された要旨・導入部、設定・方向付け、出来事、評価などが入りうると考えられる。一方、「終結部」を絵本の最後のシーンについて言及した内容が確認できるところから談話が終了するまでと限定する。絵本の最後のシーンは犬とある人が面と向かって立っている場面である。データの中からこの場面について話していると思われる部分とそれ以降の発話すべてを「終結部」と認定する。したがって、本研究における「終結部」には、先行研究で言及された解決・結果、結語・終結部、評価などの要素が入りうると考えられる。これらの要素を本研究では構造の枠組みではなく、語り手が聞き手に提示する「情報」として扱う。また、本研究のデータの特徴は、あるストーリーについて語った一定の長さのほぼ独話状態の会話資料である。口頭でストーリーを話しているため、挨拶の言葉や聞き手に対する始まりと終わりの予告も情報の一つとして捉えることができる。したがって、本研究において、「冒頭部」で言及できる情報に「始まりのことば」「要旨・導入」「設定・方法付け」「出来事」「評価」などがあり、「終結部」で言及できる情報に「解決・結果」「結語・終結部」「評価」などがあると考えた。

具体的には、まず冒頭部と終結部で取り上げられている情報を構成要素ごとに選び出した。それぞれの項目に何人が言及していたかそれぞれ数字を出し、比較分析した。さらに具体的にどのような表現が使用されたのかについても分析する。

6.2.2 結果

6.2.2.1 冒頭部における比較

ここでは日本語学習者、日本語母語話者がそれぞれ冒頭部でどんな情報を提示したのかについて表で示す。

【表 9】 冒頭部における情報の言及

		CJ	JJ
開始のことば	挨拶、始まりの予告	3	0
要旨	何についての話なのか	9	8
設定・方向付け	誰が、いつ、どこで、何を（していたか）	10	9
出来事	起きた事件は具体的に何なのか	20	20
評価	話し手の感想、コメント	6	0

表 9 について説明すると、まず冒頭部において開始のことばを用いたのは、学習者 3 名であり、母語話者には見られなかった。

例 1 今日はアンジュールという本、絵本を見ました。これについて簡単、紹介しましょう。(CJ20)

例 2 では、はじめさせていただきます。(CJ10)

例 3 じゃ始めます。(CJ14)

また、この話は何についての話なのか、要旨を提示したのがそれぞれ 9 名 (CJ) と 8 名 (JJ) である。次の例が要旨に当たる情報である。

例 4 昔、あるところに一匹の犬がいます。(CJ4)

例 5 えーと、ある犬がありました。(JJ4)

出来事の背景などの情報を提示したのが学習者 10 名、母語話者 9 名である。具体的次の例がそうである。

例 6 その野良犬がかい、あー、と、うんー、食べ物を探して自分の住んでい

るところから、うん一道に出かけました。(CJ6)

例 7 最初の場面は広い草原の中に一本の道が通ってるシーンですけれども、
そこで車が走ってきます。(JJ8)

「出来事」については学習者も母語話者も全員言及しているが、本来冒頭部を
限定する際に絵本の 1 ページ目を基準に切ったため当然の結果とも言える。

例 8 ある日一匹の犬が飼い主に捨てられました。(CJ10)

例 9 犬がえーと、えーと、車の中から捨てられて、捨てられました。(JJ14)

ただ、すべての被調査者が絵本の 1 ページ目を「犬が捨てられた」と解釈した
わけではなく、個人差が存在し、まれに例 10 のように解釈した人もいた。

例 10 この本なんですけれども、犬がいきなり車から追い出されます。(JJ16)

日本語学習者と母語話者の語りの冒頭部で一番差が出たのは「評価」である。
学習者が冒頭部に話し手の感想或いはコメントを多用し、母語話者にはそうした
特徴がほとんど見られなかった。

例 11 そうですね。これはかなり悲しい物語だと思います。(CJ9)

例 11 のような発話は話し手が絵本を見てからの感想を聞き手にどんな話だっ
たか要旨のようにまとめているため、本研究では「要旨」ではなく「評価」に分
類した。

また、冒頭部では、母語話者と比較して今回の被調査者である中国語を母語と
する上級日本語学習者の語りにおいて情報の欠如がないということが確認できた。

6.2.2.2 終結部における比較

ここでは日本語学習者、日本語母語話者がそれぞれ終結部でどんな情報を提示したのかについて表で示す。

【表 10】 終結部における情報の言及

		CJ	JJ
解決・結果	結局どうなったのか	20	20
結語	話の最後の締めくくりのことば	16	11
評価	話し手の感想、コメント	8	1

表 10 のように、終結部において、学習者と母語話者は「評価」において最も大きな差が見られた。

例 12 主はしんちゃんのところに歩いてきて、じっと見っていますが、最後にやはりしんちゃんは、うん、主に尻尾を振りながらあまい、甘えますよね。まあ、それ、そして、主もしんちゃんの帰りをなんか許したような感じです。このようなこの一、ストーリーの最後ですが、いい結末ですね。(CJ20)

「解決・結果」については学習者も母語話者も全員言及しているが、研究方法として終結部を限定する際に絵本の最後の場面を基準に切ったため当然の結果とも言える。

学習者の「結語」では、具体的に、ストーリーの実質的内容に関わりがなく、ただストーリーの終了を表す表現として一番多かったのが「以上です。」(5 例)、「はい、以上です。」(4 例)に続き、「このような物語だった。」「はい、以上です。終わりです。」「もう終わりです。」「終わりました。」「終わりです。」「はい。そういうストーリーです。」「以上です。すみません。」がそれぞれ 1 例だった。

母語話者の語りの終結部において、「以上です。」「はい、以上です。」がそれぞれ 2 例あったほか、「はい。」「で、終わりです。」「まあ、話としてはこれで終わりになります。」「お話は終わりです。」「おしまいです。」「おわり。」「終わりです。」

が1例あったという結果になった。

母語話者で結語がない者は9名と半数近くを占めるが、決して母語話者の語りには締めくくりの言葉が欠如しているというわけではない。母語話者が語りの終了時に「という+ことがらを表す名詞」という形をもちいたため、単独で「結語」として出現せず、「解決・結果」としてカウントされたからと考えられる。これについて「6.2.6 母語話者の終結部における表現的特徴」で詳述する。

6.2.3 学習者の「冒頭部」における表現的特徴

学習者の「冒頭部」における表現には以下の特徴が見られた。

①ストーリー全体がどのような意味を持っているかについて自分なりに解釈する

学習者の語りには、CJ1、CJ5、CJ6のように「犬の復讐物語です」「かわいそうな犬の話かもしれない」「野良犬が飼い犬になった物語」と物語の解釈をまず提示しておくケースが見られた。その中でも、「～わたしがこう思っていますが」(CJ1)、「～かもしれないと思います。」(CJ5)のように、ストーリーの内容の把握が主観的である可能性を含意する発話や、「～そのこと、物語を話したいと思います。」(CJ6)のような「と思う」という形式を用いた発話が特徴的である。

例 13 この絵本の中に書かれてたのはわたしがこう思ってますが、犬の復讐物語です。このような物語です。(CJ1)

例 14 ○○さん、うんー、これはうんー、かわいそうな犬の話かもしれないと思います。(CJ5)

例 15 今日は、あ、野良猫、野良犬、ごめんなさい、が、飼い犬になった、そのこと、物語を話した、たいと思います。(CJ6)

例 16 えーと、この話はえーと、捨てられる運命とその運命を破るために努力した犬の話です。(CJ16)

② ストーリーの伝え方についての説明を加える

以下の例では話し手がこれから犬の目線に立ってストーリーを進めていくということを予告した例である。実際この後話し手は「犬は～」ではなく「わたしは～」とストーリーを進めていくのである。

例 17 あの一、この映画わね、あの一アンジェールといううん一犬の物語です。
うん一、あの一、この映画の主人公は、あの一、人というより、あの一、犬ですから、視点にあの一、犬の目から世界を見る、つまり犬のあの一、第一人称が犬と設定すれば、ストーリーがよりあの一、生き生きするという感じがあると思います。うん一、この犬はあの一、飼い主に捨てられた犬です。
(CJ12)

③ 聞き手を意識した話し方をする

例 18 と例 19 はいずれも話し方がとてもユニークで、CJ13 は疑問文から始めて、CJ14 はこれから話すことを聞き手に予告することによって注意を引こうとしている。例 18 は自然な語り方とはいいがたいが、疑問文という形式で語り始め、しかもその疑問文をもう一回繰り返すことによって導入が終わり出来事に入るといいう語り方に注目してほしい。

例 18 これはいったいどんなストーリーですか？まずは皆さんもご存知のように、あ一去年ですか、え一と、日本でも使った、日本で使った映画の名前は犬の心ことですか、このような映画があります。そしてその中に、このストーリーとちょっと同じ、え一と、部分があります。それは犬が自分の主人を探すという物語です。では、この映画、絵本はどんなストーリーですか？
(CJ13)

例 19 え一、犬は、あ、動物の中で、犬はその、一番忠誠心のある動物とされていますが、え一、これから私が話したいその物語が、あの一、犬に関する物語です。じゃ始めます。(CJ14)

調査は話し手と聞き手一対一で行なわれた。例 19 では「皆さんもご存知のように」とあるが、おそらく日本語の授業でのスピーチの練習の成果ではないかと推

測する。

④ 理由やいきさつなどについて付き加える

学習者はいきなり出来事のみを伝えるのが唐突に感じるからなのか、犬が捨てられた理由や捨てられる前までのいきさつなどについて詳しく説明し、前述したように何かした出来事を述べる前に背景などを提示しておく例が多かった。

例 20 えーと、ある犬が老いてきましたので、あの一、飼い主がこの犬が負担だと思って捨てたんです。うんー、いつも乗っていた車から、その犬を、と、うんー捨てたんです。(CJ18)

⑤ 犬に名前をつけて語りやすくする

このような冒頭部で犬に名前をつけて、以降ずっとその名前呼びつづける例が5名に見られた。犬の名前も、絵本の題名の「アンジュール」が2名、そのほか絵本からヒントを得たと思われる「エンジェル」、日本でおなじみの「ハチ公」や、中国でも放送しているアニメのクレヨンしんちゃんの「しんちゃん」など日本文化に関連するものが見られた。

例 21 これから話すのは、ある、アンジュールという犬の物語です。アンジュールはその一、年をとったからご主人が捨てられて↑、その主人の一家は遠いところへ、砂漠かな↑私の想像ですけど（笑う）あー、捨てられました。(CJ7)

次の例は話し手が理解した絵本の内容が正か否かについて不安であり、その心情をそのまま言葉にした例である。普段あまり絵本見ないから間違っている可能性があるとしてストーリーに全く関係ない話し手自分自身の状況を説明している。

例 22 では、はじめさせていただきます。まず、言っておきたいのですが、この絵本はたぶん、私の理解がちょっと間違っているかもしれないです。ふだんはあまり絵本を見ないので、たぶんそれなりの理解力がないと思いますが、私の考えでは、はい。そうです。ある日一匹の犬が飼い主に捨てられました。(CJ10)

①～⑤からわかるように、学習者が聞き手にストーリーの内容を伝える際に、冒頭からさまざまな方法を駆使し、これから語ろうとするストーリーの内容について、全体像を把握させたり、予備知識を蓄えさせたりしようとしている様子が伺える。これはおそらく学習者が非母語である言語を使ってある程度まとまりのある話をする際に、その話が効率よく伝わるかどうか不安であるという一種の自信のなさの現れではないかと考えられる。また、逆にうまく伝わるかどうか自信がないからこそ、絵本に描かれているストーリーの内容に加え、それ以外の情報も提示し、聞き手にできるだけ多くの情報の中から自分の必要な情報を汲み取って欲しいという心的態度を積極的に示すのではないかと考えられる。

6.2.4 母語話者の「冒頭部」における表現的特徴

母語話者の「冒頭部」における表現には以下の特徴が見られた。

① 出来事から語り始める

ストーリーの内容全体についての紹介や出来事が起きた場所、出来事が起きた背景などについての説明について触れたのが9名である。その中でも最初の場面である「犬が捨てられる」という出来事が発生する前の状況などについて触れたのが3名である。

例 23 犬がえーと、えーと、車の中から捨てられて、捨てられました。(JJ14)

例 24 今日はこの物語について話します。あるところに一匹の野良犬がいました。その野良犬は小さいころからずっと野良犬で、あまり人とか、ほかの動物、親とかに触れたことがなくて、なんか、よう、なんか捨てるというか、そんなところにいました。(JJ13)

② 5W1Hを1発話で提示する傾向がある

物語のだれが、いつ、どこで、どうしたといった要素をたくさん含んでいる背景を一つの発話で提示する傾向がある。

例 25 何もない寂しいところで車から犬が捨てられてしまいます。(JJ5)

例 26 えーと、ある、一匹の犬が飼い主から車の中から捨てられてしまいました。(JJ6)

③ 背景の説明を控える

母語話者は出来事が起きた原因などの背景について触れるが比較的短い傾向がある。

例 27 この本の題名はアンジェールというもので、えーと、その内容についてなんですが、まず、最初に、えー、元の飼い主家族の、家族に、えー、何か理由があったんだと思うんですけど、車からまあ、道路に捨てられて、この犬は捨てられてしましまして、(JJ9)

④ 「まず」「最初に」などの表現を使用し、説明的である

これは日本語学習者と大きく違う表現的特徴でもある。

例 28 えーと、この話はまず最初に、犬があの一車で郊外のほうに連れてこられて、そこで捨てられてしまつて、(JJ11)

例 29 ある日、まず、犬がどこか知らない遠くの場所に連れて行かれて、プツとある家族に捨てられてしまいました。(JJ12)

「まず」「最初」のような順番を伝える表現を用いることによって、ストーリーを聞いたことのない聞き手に話してあげるという課題をこなす上で確かにわかりやすい伝え方ではあるが、一方でメリハリに欠けるという印象を与えかねないとも考えられる。

⑤ 「動詞+てしまう」を多用する

母語話者は出来事を語る際、絵本の1ページ目の犬が車から投げ捨てられるシーンを伝えるときに、「犬が捨てられてしまつて」のような「動詞+てしまう」を使い、出来事の取り返しの付かない悲惨な状況であることを伝えようとする。こ

の表現上の特徴が、物語の性格を直接自分の感想を述べることで聞き手に伝えようとする日本語学習者と大きく違っている点である。

例 30 えーと、ある、一匹の犬が飼い主から車の中から捨てられてしまいました。(JJ6)

6.2.5 学習者の「終結部」における表現的特徴

① 主人公の気持ちを描写する

学習者の語りでは、例 31 のように、話の最後に犬の心情を描写するケースが見られた。

例 31 この犬は最後にこのように思いました。たぶん、愛も憎しみも最初は人を思う気持ちから生まれるんだって、自分は本当に間違えたと思った。このような物語だった。(CJ1)

② ストーリーに対する気持ち・意見を表す

次の例 32、例 33 のように、ストーリーに対する自分の気持ちを述べたり、聞き手を意識し、絵本への感想を語るのも学習者の特徴的な語り方である。

例 32 この犬はまず人間に捨てられ、それから、人間だ、だまされ、自分をだましたのはあー、人間の中の、あー、純粋的な子供だというべきの子供です。うんー、あの一、悲しい物語ですね。もう終わりです。(CJ3)

例 33 えー、でも、私にとって、それは、その絵本は全然面白くないと思います。悲しいだけ、もし、自分に、えー、悲しいことに興味ない人は、その絵本は一なに？見なくてもいいです。いいと思います。(CJ9)

③ 結末を表す表現を「～と思う」を用いる

母語話者と学習者が同じ結末を伝えている終結部ではあるが、学習者のほうは結末を伝えたあとに「～と思う」表現を用いる例が 8 例と比較的多かった。

例 34 うん一、やっと、その犬とそこご主人と再会できました。あ一、たぶん
その一、ほかの人かもしれません。たぶん新しい人かもしれませんが私の理
解では、たぶん元ご主人のところにとどり着いたと思います。はい。以上で
す。終わりです。(CJ10)

例 35 私は、その最終は、うん一、ハチ公は本当の犯人を捜して、主人、あ、
その人を、その人を警察、警察官へ送って、主人の恩を返して、返したこと
になりましたとっております。(CJ19)

厳密に言えば、例 35 は決して自然な用例とは言えないが、「とっております」
を「と思う」のつもりで使用していると考えてよいだろう。ここで「と思う」を
用いた理由は、学習者が自分の推測を強く聞き手に押し付けるのを避けたか、或
いは、日本語の授業での練習の影響かはわからが、少なくとも母語の影響ではな
いと言える。というのは、同時にとった中国語母語話者による中国語のデータで
は「と思う」に当たる中国語のこうした言い方が見られないからである。

6.2.6 母語話者の「終結部」における表現的特徴

① 事実を伝えて終わる特徴

母語話者は語りを終わるときにストーリーの性格にかかわる感想などは交えず、
事実だけを伝えて終わるケースが 11 例あった。

例 37 そしてついには、その家族の息子だった男の子に出会い、アンジェール
は、え一と、出会うことができました。おしまいです。(JJ4)

例 38 で、無事再会できて、終わりという物語です。(JJ7)

② 「という」+ことがらを表す名詞

母語話者では、語りの終結部において終了を表す表現として「・・・という話」
のような「という」を伴ったことがらを表す名詞が 20 人中 9 人で観察された。

例 39 最後にその一、元の飼い主と、私としては元の飼い主かなと思う人が、

その犬を、元の道路に迎えに来て、その一、もちろん捨てた飼い主のほうもとても申し訳なく思っていて、でも、犬もずいぶんつらいことがあったにもかかわらず、その一、元の飼い主のところ、元のところに戻れてすごくうれいって、よかったなと思うっていうお話です。(JJ9)

例 40 えー、その子どもに対しては心を開いて、その一、やさしく接してもらったんで、犬はその子に対して、うまくなっついてという話です。その犬はそのなっついたというところで話が終わります。そんな、以上です。(JJ10)

例 41 それで、最初ニコニコしてたけど、じっとしてるから、「うん？ どうしたんだろう」って顔が子どもがして、で、結局、すごい、あの一、至近距離ができてから犬がうれしそうに尻尾を振って子供によって行った。というハッピーエンド（笑う）のお話です。(JJ11)

こうした表現を用いる効果について俵山(2007)は、話し手が今までのストーリーの内容は話し手自身が語ったものであることを強調し、聞き手をストーリーの中から現実へ取り戻すことができると指摘している。さらに「という」に後続する「話」などの名詞は、そこまでのストーリー全体を1つの名詞として概念化することで、それが「語り手」の手から離れ、1つのモノ・コトとして客体化されたものと捉え、このストーリーの客体化は、語り手自身がストーリーから一定の距離をおき、もとの会話の場へ軸足を移しつつあることを示すものであると分析されている。

6.2.7 日本語学習者と日本語母語話者の語りの構造のまとめ

開始部において日本語母語話者は、絵本の出来事以外の情報を加えずにそのまま語るのに対し、日本語学習者の語りは絵本の出来事以外の多様な情報を盛り込む傾向があることがわかった。出来事以外に、その出来事が起きる原因や理由、場面設定のような背景を語る傾向がある。また、絵本を見てからその内容を知らない聞き手に伝えるときに自分の感想やコメントをまず提示し、自分からみたストーリーの性格を聞き手に示そうとした特徴も見られた。これは李(2000)の会話の開始部で見られた聞き手の興味を引く「出来事の結末を先に言い出す」「出来

事から得た結論を提示する」などの言語行動を駆使していたとも言える。

また、終結部においても、日本語母語話者が絵本の結末を絵本どおりに伝えるのに対して、日本語学習者の語りは絵本のストーリーに対する感想や内容に対する評価的なコメントなどを加えて話を終結していることがわかった。

では、どうしてこのような違いが生じたのか。考えられる可能性としては二つある。

堀川（1968）は「クリちゃん」という四コマ漫画を題材に学者、評論家、童話作家や小説家など異なる職業の人の作文を比較したところ、“書く人”の性格や学歴、職業、環境などが文体に深く関係を持つことを明らかにした。本研究においても、学習者と母語話者の国柄、文化的背景、今まで受けた作文教育などさまざまな影響で言語表現の方法に文化的差異が生じたのではないかという可能性が考えられる。

また、考察からわかるように、学習者の語りの冒頭部ではさまざまなストーリーの背景や設定を述べた上で絵本の内容に入っている。同様に終結部でも結末を述べ終わったにもかかわらず、自分の理解や感想などを加えて更に説明しようとしている。こうした言語行動からは、学習者が自身の伝達能力に自信がなければいほど、たくさんの情報を提示して、その伝達能力の不足を補おうとする心的態度が伺えた。これも学習者と母語話者の違いを誘発した原因の一つと考えられる。果たしてそれが日本語学習者全体の特徴なのか、或いは母語である中国語の影響なのかについては今後の課題にしたい。

6.3 日本語学習者の語りの構造に対する母語の影響の検証

この節では、中国語母語話者の開始部と終結部における構造的特徴を分析することによって、前述した学習者と日本語母語話者の違いを誘発した要因について検証したい。

研究方法としてまず、冒頭部と終結部で取り上げられている情報を構成要素ごとに選び出した。それぞれの項目に何人が言及していたかそれぞれ数字を出し、比較を行なった。さらに具体的にどのような表現が使用されたのかについても分析した。具体的な分析方法は「6.2 日本語母語話者との比較から見た日本語学習者の語りの構造」と同様である。

詳しく説明すると、絵本の最初のページは犬が車から捨てられる場面である。

データの中からこの場面について話していると思われる部分とそれ以前の語り手のすべての発話を「冒頭部」と認定し、語りの最初にどの要素が現れているのかについて考察する。すなわち、本研究における「冒頭部」には、先行研究で言及された要旨・導入部、設定・方向付け、出来事、評価などが入りうると考えられる。

一方、「終結部」を、絵本の最後のシーンについて言及した内容が確認できることから談話が終了するまでと限定する。絵本の最後のシーンは犬とある人が面と向かって立っている場面である。データの中からこの場面について話していると思われる部分とそれ以降の発話すべてを「終結部」と認定する。したがって、本研究における「終結部」には先行研究で言及された解決・結果、結語・終結部、評価などの要素が入りうると考えられる。これらの要素を本研究では構造の枠組みではなく、語り手が聞き手に提示する「情報」として扱う。

また、本研究のデータの特徴はあるストーリーについて語った一定の長さがあるほぼ独話状態の会話資料である。口頭でストーリーを話しているため、挨拶の言葉や聞き手に対する始まりと終わりの予告も情報の一つとして捉えることができる。したがって、本研究において、「冒頭部」で言及できる情報に「始まりのことば」「要旨・導入」「設定・方法付け」「出来事」「評価」などがあり、「終結部」で言及できる情報に「解決・結果」「結語・終結部」「評価」などがあると考えた。

6.3.1 中国語母語話者の開始部における特徴

日本語学習者と日本語母語話者の開始部における語りの特徴を分析する際に用いた「【表9】 冒頭部における情報の言及」の項目を用いて中国語母語話者の開始部には以下の情報が含まれている。

まず、挨拶、始まりの予告などの「開始のことば」は2名である。同項目では、日本語学習者は3名、日本語母語話者は0名であった。

次に、何についての話なのかを示す「要旨」は11名である。ちなみに同一項目では、日本語学習者は9名、日本語母語話者は8名である。三者とも語りの冒頭では犬についての話であることを提示していた。

また、だれが、いつ、どこで、何を（していたか）というストーリー設定・方向付けに行なったのは、中国語母語話者は8名で、日本語学習者と母語話者はそれぞれ10名と9名で、この項目においても三者の間に差が見られなかった。

起きた事件は具体的に何なのかについて出来事を述べたのが三者とも 20 名全員である。その理由は、分析方法として開始部をストーリーの最初の画面までであると認定しているため、当然の結果であるとも言えよう。

最後に、話し手の感想、コメントを入れて、開始部に評価を行なったのが中国語母語話者は 2 名である。同項目において、中国語学習者は 6 名、日本語母語話者は 0 名であり、中国語母語話者と日本語母語話者の開始部の情報がより近い結果となった。

具体的に見てみると、中国語母語話者のうち、ストーリー全体がどのような意味を持っているかについて自分なりに解釈を行なうのが 2 名である。

例 42 下面我们来讲一个故事，故事的题目是让我们来反思一下人性。(CC17)
(これからある物語を言いますが、このストーリーのテーマは人間性について反省してみようというものです)¹⁷

例 43 这个漫画主要是讲一只小狗，嗯，流浪的过程。然后也是不断地被爱抛弃，然后又获得爱的过程。(CC4)
(この漫画主は主に犬が、うーん、流浪する過程についてです。絶えずに愛に捨てられ、そしてまた愛を獲得する過程でもあります。)

日本語学習者は犬に名前をつけて話しやすくするなどの工夫が見られたが、中国語母語話者が犬に名前をつけて語るという語り方は 1 例しか見られなかった。

例 44 好，然后这儿有一个故事。故事的主人公是一只狗，狗的名字叫做 **Lucky**。
(CC2)
(はい、ここにあるストーリーがあります。ストーリーの主人公は一匹の犬です。犬の名前はラッキーといいます。)

また、中国語母語話者には、語りの冒頭からいきなり出来事を語り始める例が 5 例見られ、日本語母語話者と同様、5W1H を 1 発話で提示する傾向が見られた。

¹⁷ 中国語の例文に対する日本語訳は全て論文執筆者によるものである。

例 45 有一天在没有人的荒野上，有一只狗被它的主人从车里扔了出来。嗯，它的主人扔下它以后就开车走了。(CC10)

(ある日、誰もいない野原で、ある犬が飼い主に捨てられた。うーん、飼い主は犬を捨てていってしまった。)

更に、中国語母語話者の語りの開始部は、背景の説明を控えて、「まず」「最初に」などの表現を使用し、説明的であることが分かった。これも日本語母語話者と共通する特徴である。

例 46 嗯，这故事就是开始的时候呢，就是，一家人，然后开了一辆车，然后在路上行驶。然后他把他们家的狗从车窗中丢出来了。(CC13)

(うーん、この物語の最初は、ある家族がいて、で道路で車を運転していた。で、彼はお家の犬を車の窓から捨てた。)

以上のことから中国語母語話者の開始部には、

- ① 出来事から語り始める。
- ② 背景的説明を控え、5W1Hを1発話で提示する傾向がある。
- ③ 「まず」「最初に」などの表現を使用し、説明的である。

などの特徴が見られ、日本語学習者の語りの開始部と異なる傾向が見られた。これらの特徴はむしろ日本語母語話者に共通する傾向ともいえよう。

では、以下では、中国語母語話者の終結部における特徴について考察する。

6.3.2 中国語母語話者の終結部における特徴

日本語学習者は語りの終結部では、絵本のストーリーに対する感想や内容に対するコメント、評価を加える傾向があることが分かった。そしてその原因は、学習者としてのストラテジーという可能性だけではなく、母語や母文化の影響を受けた結果であろうという可能性もある。この節では中国語母語話者の語りの終結部に注目することによって、母語や母文化の影響について検証する。

中国語母語話者は終結部でどのような情報を提示しているのか。表2の項目で

比較してみると、話の最後の締めくくりのことばを話しているのが 13 名である。ちなみに日本語学習者と日本語母語話者はそれぞれ 16 名と 11 名であった。

また、中国語母語話者には、話し手の感想とコメントを含めたストーリーの対する評価は 2 例しか見られなかった。それに対して、日本語学習者は同一項目において 8 名、日本語母語話者は 1 名であった。

以下は中国語母語話者に見られたストーリーに対する評価である。

例 47 因为这个小女孩很纯洁，她以为她的，她的就是可以给这只狗喂奶，就是那样，妈妈给自己吃过奶的这种强烈的感情，就是她要给这只狗吃自己的奶水，这样。她不明白，但是人性中的善良驱使她这么做，这个故事讲完了。（CC17）

（この女の子はとして純粹です。彼女は自分がこの犬に母乳をあげられるもんだと思い込んでいる。自分のお母さんが自分に母乳を与えたのと同じように、強烈な感情を持っている。彼女もよく分からない。だけど人性の善良が彼女をそうさせたのだ。このストーリーは終わりです。）

例 47 の CC17 は語りの開始部でもストーリーに対して自分の感想を述べている。（例 42 参照）例 47 は開始部との呼応ともいえる。

例 48 嗯，但是，但是怎么说，相信我们俩个可能都找到了一个新的希望。（CC4）
（うーん、でもどういけばいいかな、きっと私たちは二人とも新しい希望が見つかったに違いない。）

例 48 も、開始部の例 43 と呼応する例である。CC4 は中国語母語話者 20 名のうち、唯一犬を「私」と置き換え、第 1 人称でストーリーを進めた例である。例 48 は、犬になりきって、犬の心情を描写した例である。厳密に言うと、ストーリーに対する評価に当てはまらないが、犬の心理に注目している面ではほかの例文と異質なものを感じるため、ここではストーリーに対する感想、評価に分類する。

また、ストーリーの伝え方についていうと、例 48 と同様に犬の目線に立ってストーリーを進めた例が日本語学習者にも存在する。（例 18 参照）ただ、両者の違いは、日本語学習者は語りの冒頭で語りの伝え方に対して聞き手に説明したのに対し、中国語母語話者は語りの開始部にストーリーの伝え方について説明を加

えたのではなく、犬が捨てられたという事実を伝え、ある程度話を進めた段階で第一人称に切り替えたのである。

例 49 ……然后把这只狗扔出了窗外。嗯，但是说，我现在就以这个狗的自述说一下这个故事。比如说我是一个年迈的狗。(CC4)

(……で、犬を外に捨てました。うーん、だけど、私はこれからこの犬の自身が述べる形でこのストーリーを進めたいと思います。例えば、私は一匹の年をとった犬です。)

例 49 は、語りの最初は第 1 人称で語るつもりはなかったが、話を進めているうちにやはり第 1 人称に進めたかったのか、語り方の方針の転換の表れと推測される。その後のインタビューでは、第 1 人称で語った理由について訪ねたところ、「特に意識してなかった。自分でもよく分からない」という回答であった。

中国語母語話者の終結部に最も多かったはストーリーの結末を伝えてすぐ結語を添えるというパターンである。全 20 名中 12 名あった。これは日本語母語話者に共通する特徴である。

例 50 然后那个小孩子看到它就变得很开心。然后那个狗狗就扑上来舔他。然后这个故事就结束了。(CC6)

(で、子どもは犬を見てとてもうれしくなった。で、あの犬は子どもを身を乗り出して彼を舐めた。で、この物語は終わりです。)

以上、中国語母語話者の語りの開始部と終結部について分析した結果、開始部において中国語母語話者は、絵本の出来事以外の情報を加えずそのまま語る傾向にあることが分かった。また、終結部においても絵本の結末どおりに伝える特徴が見られた。

また、中国語母語話者に対するフォロアップインタビューの結果、「どうして最後に自分の感想を加えなかったのか」という質問に対して、「聞き手が大人だから事実を伝えるだけで十分だと判断した。」「自分の感想をいうと聞き手が自分で考える余地がなくなるからである。」「そこまで考えていなかった。」などの回答があった。

6.4 日本語学習者の語りの構造のまとめ

本章では、日本語学習者の語りの構造を明らかにするため、まず、日本語母語話者の語りと比較し、日本語母語話者との違いを探った。また、中国語母語話者の語りを分析することによって、日本語学習者の語りの構造を形成している心的要因についても探った。

開始部において日本語母語話者と中国語母語話者は、絵本の出来事以外の情報を加えずにそのまま語るのに対し、日本語学習者の語りは絵本の出来事以外の多様な情報を盛り込む傾向があることがわかった。出来事以外に、その出来事が起きる原因や理由、場面設定のような背景を語る傾向がある。また、絵本を見てからその内容を知らない聞き手に伝えるときに自分の感想やコメントをまず提示し、自分からみたストーリーの性格を聞き手に示そうとした特徴も見られた。

また、終結部においても、日本語母語話者と中国語母語話者が絵本の結末を絵本どおりに伝えるのに対して、日本語学習者の語りは絵本のストーリーに対する感想や内容に対する評価的なコメントなどを加えて話を終結させていることがわかった。

日本語母語話者と中国語母語話者の語りの開始部と終結部における特徴が一致し、中国語学習者が異なったという結果から見れば、日本語学習者の語りの開始部と終結部の特徴を形成した要因は、母語や母文化を背景にしたものではなく、日本語学習者が自身の伝達能力に十分に自信が持てないため、たくさんの情報を提示して、その伝達能力の不足を補おうとする日本語学習者ならではのストラテジーにあるのではないかと考えられる。

第7章 接続表現における特徴

本章では、談話の展開過程で使われている後続文の文頭にある接続表現¹⁸を、接続形式の種類とそれぞれの使用数を中心に考察していく。

7.1 接続表現に関する先行研究

石黒（2010）は「話し手が長い独話によって論理的な内容を伝えようとするとき、書き言葉の論文・レポートなどと同様に、接続表現は高い頻度で出現し、談話理解の上で重要や役割を果たすことが多い」と指摘しているように、ある程度長さのある独話である本研究の語りにも接続表現が談話の展開において重要な役割を果たしている。

4コマ漫画或いは6コマ漫画、アニメーションを調査材料にし、日本語学習者と母語話者の談話を分析したものには栃木(1989)、田代(1995)、渡邊(1996)、増田(2000)、庄司(2001)、渡辺(2003)などがある。これらの研究は、それぞれ接続表現、指示表現、視点、語彙選択などの観点から日本語学習者と母語話者の談話を比較分析し、中上級日本語学習者の文章或いは会話の特徴をさまざまな角度から明らかにしている。

そのうち、渡邊(1996)は個々の文法項目をストーリーの談話展開と関連付けた上で、中国語を母語とする日本語学習者と母語話者の談話展開が大きく異なると指摘している。中国語を母語とする日本語学習者の談話展開は中立視点で、文の連接ではゼロ接続形式が中心であるのに対し、母語話者のストーリーの展開は固定注視点、受身・授受補助動詞、「て形」、接続詞、指示詞などの要素が語りの内容と組み合わせさせて談話展開スタイルを組み立てていることを示した。

そのほか、インタビューを用いて、上級日本語学習者の談話における接続表現の使用を考察した先行研究には深川（2007）がある。深川（2007）は学習者にイ

¹⁸ 森田（1987）によれば、文の連接を担うものとして接続表現と指示詞があるが、その中で、接続表現に2つのタイプがあるという。一つは完結文や文相当のものを連結するときに使われる先行文の文末（接続助詞、連用中止法、終止形）の形式である。もう一つは完結文・文相当のものを連結するときに使われる後続文の文頭にある表現（接続詞・副詞・意味的な関連）である。

インタビューを行い、自分の体験や出来事を語ったり、自分の考えを述べたりする場面における発話を収集し、それを日本語母語話者と比較し、接続表現の特徴を探究した。その結果、日本語学習者は文と文をつなぐ接続表現を駆使していることがわかった。また、日本語母語話者は「それで」「で」を用いて談話を展開するが、日本語学習者にはそれがほとんど見られなかったと報告し、上級日本語学習者は1文レベルでの接続はあまり問題にならないが、文と文がつながり、談話としてのまとまりを形成するための多様な言語形式はあまり運用されていないと指摘している。

では、日本語学習者と日本語母語話者は独話においてどのように接続表現を用いるのか。

本研究では、談話の展開過程で使われている後続文の文頭にある接続表現を、接続形式の種類とそれぞれの使用数を中心に考察していく。

7.2 日本語母語話者との比較から見た日本語学習者の接続表現の特徴

本研究ではまず、文頭に出現した接続表現がどのような文脈展開を表しているかという点に注目して、順接、逆接、場面展開、説明と大きく4つに分けて分析を行った。

【表 11】 文頭に出現した接続表現

分類		学習者	学習者内訳 Cは話し手番号 ()は延べ使用回数	母語話者	母語話者内訳 Jは話し手番号 ()は延べ使用回数
① 逆接	でも	50	CJ1(6) CJ3(2) CJ4(1) CJ5(5) CJ6(3) CJ7(2) CJ9(1) CJ11(6) CJ12(3) CJ13(6) CJ14(5) CJ17(1) CJ18(2) CJ19(4) CJ20(3)	13	J3(1) J5(1) J6(1) J7(1) J9(1) J11(1) J13(1) J16(1) J17(2) J19(3)
	しかし	18	CJ2(2) CJ3(3) CJ8(3) CJ9(2) CJ11(1) CJ16(2) CJ17(3) CJ19(2)	2	J2(2)

	それでも	0		2	J3 (1) J6 (1)
	それでも なお			1	J2 (1)
	ところが	2	CJ2(2)	0	
	ですが	1	CJ2(1)	1	J15(1)
	が	1	CJ2(1)	0	
	けれども	0		1	J8 (1)
	けれど	0		1	J12 (1)
	ただ	1	CJ9(1)	0	
	計	73		21	
② 順 接	だから	5	CJ5(1) CJ13(2) CJ19(1) CJ20(1)	2	J5 (1) J18(1)
	それに	1	CJ8(1)	0	
	そのあと	5	CJ1(2) CJ13(1) CJ20(3)	1	J7(1)
	そのとき	14	CJ1(5) CJ3(1) CJ7(1) CJ12(2) CJ13(1)CJ17(2)CJ19(1)CJ20(1)	3	J9(1) J19(2)
	そこで	3	CJ11(1) CJ19 (1) CJ20(1)	14	J8(1)J9(1) J10(1)J12(1) J13 (2) J12(1) J13(2) J17(1) J19(4)
	それで	16	CJ1(1) CJ4(2) CJ9(1) CJ12(7) CJ16(2) CJ19(2) CJ20(1)	22	JJ4 (1) JJ5 (7) JJ6 (2) JJ11(6) JJ12 (1) JJ14 (1) JJ17 (1) JJ18(3)

	そして	49	CJ1(1) CJ3(1) CJ5(1) CJ6(5) CJ7(3) CJ8(16) CJ9(3) CJ11(1) CJ12(7) CJ13(7) CJ17(1) CJ20(3)	34	JJ2 (7) JJ3 (3) JJ6 (1) JJ9 (4) JJ10(1) JJ13(2) JJ15 (4) JJ17 (2) JJ19(3) JJ20(7)
	そしてつ いに	0		2	JJ3 (2)
	それから	9	CJ3(1) CJ4(3) CJ6(3) CJ7(1) CJ17(1)	1	JJ18(1)
	そしたら	0		3	JJ10(1) JJ19(2)
	また	0		4	JJ6(1) JJ8(2) JJ12(1)
	まず	2	CJ10(1) CJ13(1)	5	JJ7(1) JJ9(1) JJ10 (1) JJ12(1) JJ15 (1)
	最初は	1	CJ5(1)	1	JJ18(1)
	最後は	4	CJ13(4)	2	JJ4 (1) JJ18(1)
	最後に	4	CJ3(1) CJ5(1) CJ14(1) CJ20(1)	2	JJ4 (1) JJ9(1)
	で	27	CJ11(1) CJ12(1) CJ15(6) CJ16(5) CJ18(14)	87	JJ1 (9) JJ2(1) JJ3 (4) JJ4 (13) JJ6 (1) JJ7 (11) JJ8 (1) JJ9 (2) JJ10 (8) JJ11(9) JJ12(1) JJ14(3) JJ15(1) JJ16 (4) JJ17 (7) JJ18(2) JJ19(8) JJ20(2)
	合 計	140		183	

③ 場 面 展 開	すると	0		6	JJ2 (1) JJ3 (1) JJ6 (1) JJ8 (1) JJ11(1) JJ15(1)
	そうす と	2	CJ9(2)	4	JJ5 (1) JJ12 (1) JJ15(1) JJ16(1)
合 計		2		10	
④ 説 明	つまり	5	CJ6(1) CJ12(1) CJ13(1) CJ18(2)	0	
	なぜか と いうと	3	CJ2(1) CJ6(1) CJ17(1)	0	
計		8		0	

7.2.1 逆接

上記の表からわかるように、学習者は、文頭で逆接の接続表現を多用し、特に「でも」「しかし」の使用が多く見られた。それに対し、母語話者の逆接は21例で、比較的少なかった。

その原因としては二つ考えられる。一つは、母語話者と学習者の語りにおける視点に関係するのではないかと思われる。次の場面は犬と車が絵本において同時に出現している場面である。例1のように、母語話者の視点は犬→車へ移動しても基本的にストーリーの流れにそって順接を用いて展開していくが、学習者の視点は犬→車へ移動するときに、犬と車を対立させ、逆接を用いてストーリーを展開していくという傾向が見られる。

例1 えー、そこで、その一、途中でその一、道路を横断しようこの犬が思ったときにその車が、犬をよけようとした車が事故になってしまって、そして、その一、もちろん犬はそのつもりで飛び出たわけではなかったですが、その車の事故が玉突き事故になってしまって、その一、火が出たりして、ちょっと大変な状況になってしまって、まあ、犬も申し訳なく思っていました。

そして、その一、まあ、犬はその場からちょっと逃げるようにして、・・・(JJ9)

例 2 そうですね。あの一、あの一、あ一、ある日犬が自分の主人にあの一、車の中から捨てられた。えーと、その犬が、あの一、車を追いつけて、でもその車が、その一速度がとても速いのです。でした。でもその犬はずっと一生懸命、あの一、追いかけた。でも、犬は走ればあの一、走るほど犬はあの一、疲れてきた。(CJ11)

もう一つは、文の長さに原因があると思われる。母語話者の語りに「けれど、けれども、が」などで終わる文が多く、完結文の文内では逆接になるが、しかし、完結文と完結文の間は順接が用いられる傾向がある。一方で、学習者の語りにおいて完結文が多いため、後続文の文頭に必然と接続表現を必要とするようになってくるのではないかと考えられる。

例 3 えーと、一匹の犬が飼い主の一家とドライブをしていたんですけど、途中でその飼い主の人たちに捨てられてしまって、で、捨てられて、その車はどんどん遠ざかって行くんですけど、その犬は一生懸命その飼い主の乗ってた車を追いかけます。で、ぜんぜん追いつかないんですけど、ひたすら止まることなく、一生懸命犬は追いかけます。(JJ7)

例 4 一匹の犬がもともと幸せな暮らしを暮らしてました。主人とすごく仲良く、毎日楽しんでました。でも、ある日突然主人に砂漠まで連れ出されて、そこにおかれ、おかれたまま主人たちが帰ってしまった。(CJ1)

7.2.2 順接

ほとんどの母語話者が順接の「で」を用いるが、学習者は延べ 27 回しか使用していない。それに代わってより書き言葉的である「そして」「それから」の使用が比較的多かった。

「で」を用いた学習者は主に C15 が 6 回、C16 が 5 回、C18 が 14 回と 3 人に集中していた。

例 5 で、ずっと歩いていっているうちに、町までたどり着きます。郊外に捨てられたんですけど、町までたどりついて、家族を探んですけど、なかなか見つかりません。で、まー、途方に暮れながらも歩いていると、(JJ4)

例 6 そして、まあ、その、その犬はそういう人間に見捨てられたんで、まあ、人間がちょっと嫌いになって、で、道に来る車の前にわざと出て、ちょっと驚かしてやろうと思って、飼い主じゃない別の車の前に出たんですけど、まあ、そしたら、まあ、急に、犬が出てきたんで、事故を起こってしまって、で、犬はこれはまずいなと思って、見てたら、どんどん事故がえらい大事故になっていて、で、これはどう、どうしたものかと思って、とりあえずその場を逃げ去るわけです。(JJ10)

例 7 犬はずっと走って走って疲れて、疲れてしまいました。車の中の人はその犬をみて変だなあ〜と思いました。うんー、それから犬はえーと、ずいぶん疲れていて車が遠くのところへ行くのをみてました。うんーそれで、ひとりぼっちになってさびしくなりました。(CJ4)

例 8 うん、そして、あの一、高速道路で走っている車の流れを見て、あの一、いいアイデアが、あ一、私の頭に浮かんできました。うんー、あの一、それらの車の中にいる人たちは、あの一、私の飼い主じゃないことは分かっています。でも同じ人間です。うーん、そして、その人たちもしかして、あの一、同じく動物を虐待する経験があるかもしれません。うーん、それで私は、あの一、あの一、決心した、やっとな。うーん、そして、あの一、タイミングをよく見て、あの一、二台の車の中へ、あの一、飛び込んだ。(CJ12)

例 9 ある日、犬は車の窓から投げられました。で、その犬は車を一生懸命追いかけてやりましたが、その車はだんだん走っていきました。で、その犬は居場所がなくて、道端から、道端で生活していました。うんー、主人のか、帰りを待っていましたが、帰ってこなかったんです。で、その一、ある日、主人と同じ車を見かけて、道端から飛び出したんですが、で、その車を運転する人が主人ではなくて、ほかの人だったんです。で、その人はその一、その犬におどろい、その犬にびっくりして、道端で止まっていたほかの車とぶ

つかっちゃいました。で、事故になってしまいました。(CJ15)

例 10 えー、そんなにかわいがってくれたのに、私が、あの一、老いたとたん、負担だと思った人、なんって残酷な人だとこの犬は、あの一、思ったんです。で、そ、で一、あの一、この一、あ、道に止まっている犬が、えーと、あと一何というか、怒り、急に怒りに燃えたんです。で、復讐っていうプランが頭にあの一、浮かんだ。えーと、この犬があるプランをうーん、思い出した。その車の匂いを嗅いで、嗅ぎながら、あの一、車のゆく場所を探しました。で、えーと、あの一、あるところで、そのよく知ってた匂いを見つけた。で、その一、だんだんだんだんその一、車が寄ってきました。で、その車がたぶん五メートルまでのところで、この一、犬があ一、とっさに飛び出した。中に飛び出した。(CJ18)

7.2.3 場面展開

母語話者は「すると」「そうすると」を用いて場面展開を表し、構造上、出来事の間につながりが強く、次から次へとストーリーが展開していく。次の例 11、例 12 は両方ともストーリーが次の展開へ行き、絵本の場面が変わるところである。母語話者は物語を語る際によく用いられる「すると」を使用することによって次の場面を引き出している。このような語り方は学習者には見られなかった。

例 11 で、犬は、犬の着いた先が住宅街の中だったんだけども、結局そこには飼い主がいなくて、また、次の知らない道をどんどん進んでいきました。すると、ひとりぼっちの少年に出会いました。その少年は自分のほうに寄ってきてくれて、心配そうな目で自分のほうを見てくれました。(JJ6)

例 12 で、放浪を始めてしばらくは、後姿が悲しげになってきて、それでだんだん日が暮れてきたのか、天気も変わってきて、それでもまだ放浪を続けています。で、放浪をしていると、遠くになにかが見えたようなので、そこに向かって歩いて、町ですかね、町が見えたので、そこに向かって歩いていくことにしてみました。すると、建物の間を、こう一探索というか、またうろうろしていると、町、そこは町でした。

学習者は場面展開時に「ある日」「突然」などの表現を用い、場面と場面のつながりが薄く、場面と場面の関連度が低く見える。次の例 13 は例 12 と、例 14 は上記の例 11 とそれぞれ同じ場面である。

例 13 あー、その空き地には犬の孤独の姿しか見えない。突然、犬はなんかにぎやかなこ、音が耳にした。犬は、あー、その村に、村か、都市かに向かって、あーん、行きました。犬はその道端でその、その村の中の道端でえさを探していた。でも、どこからともなくやってきた一人のおじさんが犬を追いかけてしまいました。(CJ3)

例 14 この犬は街中にぶらぶらしているから、人にしかりつけたこともありました。なんでここにいるだろう、こういうおじちゃんの話聞いて、犬は心細く逃げた、逃げてしまいました。突然、ある日、一人の子供が、放課後、自分のうちに帰る途中、この犬と出会いました。(CJ6)

ただし、接続表現と語り方そのものの表現の力の観点からみれば、学習者の談話には、「突然」「急」などの状況変化や事態の発生などを表す副詞を多用し、はらはらどきどきとした場面の急展開が繰り返される。物語としては聞き手に「次はどうしたの、何が起きるの」と思わせる効果がある。

例 15 うんー、いま、犬しかいないこの空き地に、犬はある、歩いて、突然、遠いところに二人の姿が見えました。あの、もしか、もしですかと思って、その二人の姿に向かって、(CC3)

例 16 自分の住んでいるところから、うんー道に出かけました。突然、道から、車が飛んできて、この犬をぶつかった。(CJ6)

この点で言えば、母語話者は物語を進めるときに順接の接続詞などを用いて、出来事を淡々と羅列している印象がある。

例 17 で、ずっと歩いていっているうちに、町までたどり着きます。郊外に捨

てられたんですけど、町までたどり着いて、家族を探んですけど、なかなか見つかりません。で、まー、途方に暮れながらも歩いていると、あの一、一人の男の子に出会います。で、その男の子、最初はちょっと犬に興味があって近づいてきてくれるんですけど、(JJ4)

【表 12】 接続表現以外の展開を表す表現

	CJ	日本語学習者内訳	JJ	日本語母語話者内訳
ある日	8	CJ4(2) CJ7(1) CJ11(3) CJ15(2)	3	JJ3(1) JJ12(1) JJ20(1)
突然	7	CJ3(4) CJ6(2) CJ8(1)	0	
結局	4	CJ1(1) CJ2(1) CJ9(2)		JJ2(1) JJ6(2) JJ11(2) JJ14(3) JJ16(3)
やがて	0		1	JJ12(3)
やっと	1	CJ10(1)	0	

() は延べ使用回数

接続表現を使用しないで、副詞などを用いて展開を表すものには、前ページの表 12 のような表現が見られた。

7.2.4 説明

母語話者に「つまり」「なぜならば」のような説明もあるが、母語話者にはこうしたストーリーの展開を後から説明するものは見られなかった。

例 18 人々は大騒ぎしました。「なんだ？この犬？この犬、ほんとに悪いやつだね。」犬はこれを聞いて大喜びでした。うんー、なぜかというと、自分が、その、自分を捨てた人間に復讐をしましたから。けっこう大喜びでしたけど、うんー、このようないたづらを・・・(CJ2)

例 19 で、ハンドルをあの一、急に握りましたら、あの一、ほかの車にぶつかりました。で、あの一、二つの車があの一、あ、この二つの車ともひっくり返ったんです。で、つまり、大事故に、大事故になってしまったんです。この

犬はこれを見て怖かったんです。(CJ18)

以上、学習者と母語話者の語りにおける文頭の接続表現の使用について考察したが、学習者は、

- ① 逆接の接続表現が多い
- ② 「突然、急に」などの副詞に場面展開の機能を与えている
- ③ 継起的な接続表現がなく、一つ一つの場面が独立している
- ④ ストーリーの展開に起伏が感じられる

などの特徴が挙げられる。

一方、母語話者は、

- ① 順接を中心に語りを進めている
- ② 接続表現が話し言葉的である
- ③ 継起的な接続表現が用いられ、場面間の関連が緊密である
- ④ ストーリーが淡々と展開されている

などの特徴が見られた。

7.3 日本語学習者の接続表現に対する母語の影響の検証

日本語学習者の語りの特徴として、「でも」「しかし」のような逆接が多く、「ある日～」「突然～」などの表現を用いて、場面一つ一つが独立しているという傾向が見られた。これは中国語母語話者の語りにも共通する特徴である。中国語母語話者の語りにも「虽然、但是（でも／しかし）」用いることが多かった。ただし、日本語の「で、そして」に当たる「然后、完后、完了以后、完了、后来」を用いて順接で場面を展開していく例も数多く見られた。

以下では、中国語母語話者の語りにおける接続表現を日本語学習者と比較しながら見てみよう。

まず、中国語の逆接を表す接続表現には「但是，可是，虽然」などがある。そ

それぞれの出現頻度を見てみると、

【表 13】 中国語母語話者の逆接を表す接続表現

但是	CC1 (11), CC2 (5), CC3 (3), CC4 (8), CC5 (12), CC6 (3), CC7 (8), CC8 (4), CC9 (4), CC11 (5), CC12 (8), CC13 (7), CC14 (2), CC15 (3), CC16 (3), CC17 (3), CC18 (9)
可是	CC10 (1)
虽然	CC12 (1)

次に、中国語の順接を表す接続表現には「然后，后来，完后，于是，之后，过后，后来，并且，因为，所以，首先，最后」などがある。それぞれの出現頻度を見てみると、

【表 14】 中国語母語話者の順接を表す接続表現

順接を表す	然后	CC1 (10), CC2 (12), CC4 (21), CC5 (11), CC6 (38), CC7 (8), CC8 (3), CC9 (24), C10 (1), CC11 (9), CC12 (23), CC13 (15), CC14 (13), CC15 (12), CC17 (9), CC18 (21), CC19 (13), CC20 (38)
	后来	CC3 (3), CC4 (1), CC9 (3)
	完后	CC12 (4), CC19 (1), CC20 (1)
	于是	CC3 (1), CC4 (11), CC7 (3), CC9 (1), CC10 (5), CC15 (2), CC16 (1), CC17 (1), CC18 (4), CC20 (2)
	之后	CC4 (1), CC17 (1), CC19 (1), CC20 (1)
	后来	CC3 (3), CC4 (1), CC9 (3), CC19 (1)
並列を表す	并且	CC13 (1), CC19 (1)
原因を表す	因为	CC1 (4), CC2 (1), CC5 (1), CC15 (2), CC17 (2), CC18 (3), CC19 (2), CC20 (1)
	所以	CC1 (13), CC4 (3), CC5 (2), CC11 (1), CC12 (1), CC18 (1), CC19 (1), CC20 (7)
順序を表す	首先	CC4 (1), CC9 (1)
	最后	CC1 (1)

このように、中国語母語話者がもっとも多く使用している接続表現は順接を表

す「然后」と逆接を表す「但是」である。

例 19 然后它可能是这个人拿着垃圾桶，垃圾桶里可有吃的吧，但是这个店主觉得这个流浪狗太脏了，所以不理它，把它赶走了。然后呢，它发现了一个少年，这个少年是个小孩，看起来是个男孩吧，男孩对它很友好，这个跟刚才店主不一样。然后这个男孩要跟它打招呼，靠近它，他伸手。

(それで、犬は、たぶんこの人は手にゴミ箱を持っていて、おそらくゴミ箱に食べ物があるのでしょう。だけど、店主はこの犬が汚すぎると思って、犬を追い払ったのです。で、犬は一人の少年に出会います。この少年は子どもでした。男の子みたいです。男の子は犬にとっても友好的で、さっきの店主とぜんぜん違います。で、この男の子は犬と挨拶し、犬に近づいて、手を差し伸べました。)

例 20 我觉得这个故事主要讲述的就是说有一只狗。但是这只狗被它的主人给抛弃了、把它扔到了一个类似高速公路的地方。然后这只狗或许是很信任它的主人吧。然后就一直在追吧。但是它的主人很决绝、没有停下车。(CC5)

(この物語で語っているのはある一匹の犬がいて、でもこの犬はその飼い主に捨てられ、高速道路のようなところに捨てた。で、この犬はたぶん犬は自分の主人を大変信頼しているのかな、で、ずっと追いかけていた。でもその飼い主は見返りもせず、車をとめることはなかった。)

例 21 然后它又又出来了。

然后有一个老爷爷，好像做卫生老爷爷那样子。

然后就指了一下，好象是说它找的人在哪里。

然后狗狗就去了那个地方。

然后就看到了它要找的那个小孩子。

那个小孩子把书包放在地上那样子。

然后那个小孩子看到它就变得很开心。

然后那个狗狗就扑上来舔他。

然后这个故事就结束了。(CC6)

(で、犬はまた出てきた。で、一人のお爺さんがいて、清掃のお爺さんのようでした。で、指で指して、まるで犬が探そうとしている人はそこだと言っ

ているようだ。で、犬はそのはそっちに向かった。で、自分の探そうとした子どもを見つけた。あの子どもはかばんを地面においてるように見える。で、子どもはとても喜んだ。で、彼に近づいて彼を舐めた。で、このストーリーは終わりです。)

中国語母語話者のうち、「然后」を使用していない例は CC3 のみで、「然后」の代わりに「后来」3 回を使用している。

例 22 他走了很远，到处想找到他的主人。但是一直也没有找到。他就顺着公路往那个，原来住的城市走。嗯，它饿的时候就到垃圾桶里找垃圾去。后来它在路上遇到了一个小孩儿。(CC3)

(彼はとても遠く行って、自分のご主人を見つけようと思いました。しかし、ずっと見つかりませんでした。彼は道路に沿って歩き、前の住んでいた街へ歩きました。うーん、犬はお腹が空いたらゴミ箱からゴミを探します。で、彼は道である子どもに出会います。)

今回の調査では、日本語学習者には、説明を表す「つまり」「なぜか」というと」の使用がみられたが、中国語母語話者には該当する接続表現の使用が見られなかった。また、場面展開において、日本語学習者は「突然」を用いたため、場面一つ一つが独立しており、起伏を感じさせる語りになったが、中国語母語話者の語りにも「突然」の使用が見られた。

「突然」の使用者と使用頻度を示す。()内が使用頻度を表す。

CC1(1), CC4(3), CC5(1), CC6(1), CC11(1), CC12(3), CC14(2), CC16(1), CC18(1), CC19(4), CC20(3)

例 23 然后，突然过来了，迎面过来一辆汽车。这个小狗它就突然穿向路中央，挡住了汽车，汽车的去路。(CC19)

(で、突然来ました。向かい側から一台の車が来た。この犬は突然道の真ん中へ走って、車の行く道を邪魔しました。)

以上、中国語母語話者の特徴として、順接の「然后」を多用することが分かつ

たが、興味深いのはその使い方である。次の例を見てみよう。

例 24 这是一个说，关于一只狗的故事。然后那么故事的发生地，像一个类似沙漠的一个地方，但是沙漠应该不是很大，中间还有一条公路，可以通过的。
(CC18)

(これはある犬の物語です。で、物語の場所は砂漠のようなところで、だけど砂漠はそんなに大きくないはずで、真ん中に道路があつて、通ることができます。)

例 25 嗯，这故事就是开始的时候呢，就是，一家人，然后开了一辆车，然后在路上行驶。然后他把他们家的狗从车窗中丢出来了。(CC13)

(あー、この物語の最初は、あの、ある家族が車を運転して、で、道を走っていました。で、彼は自分のうちの犬を車の窓から投げ出しました。)

例 24 と例 25 はいずれも順接を表す「然后」を用いるが、いずれも語りの冒頭の部分における使用である。会話における「然后」の使用について方(2000)は、「然后」は自然会話において意味の弱化を起し、本来の意味関係以外に、ディスコース・マーカ―としての役割を担うと指摘している。

中国都市青少年話しことばコーパスを調査対象にした許(2009)でも、青少年話しことばデータベースにおいて、過半数の「然后」が時間の順序、論理的順序の後続関係を表せず、本来の意味が薄くなり、談話の連続性の保持のために用いられると報告している。

また、馬(2010)では、「然后」は本来時間の順序を表すが、意味の弱化によって、ターンの継続のほか、話題の提起、展開、持続と転換の機能を果たすと指摘している。本研究は独話のため、このうち、話題の展開の役割を果たすのではないかと見られる。

一方、独話における「で」の機能について石黒の一連の研究がある。石黒(2007)では、講義に占める「で」の割合は講義全体の半分近くを占め、出現頻度が最も高いと指摘している。また、石黒(2008)では、講義に見られる接続表現「で」は、表現内容や表現方法を考えている時間を稼ぐためのフィラーと重なって出現し、次に述べる情報の質を限定して示すものであると指摘している。

このように、今回の調査では、日本語の「で」と中国語の「然后」はいずれも

本来の順接の接続表現としてのみならず、フィラーとしての機能も果たしていることが分かった。

7.4 接続表現のまとめ

以上、日本語学習者と日本語母語話者の語りにおける文頭の接続表現の使用について考察したが、日本語学習者には、

- ① 逆接の接続表現が多い
- ② 「突然、急に」などの副詞に場面展開の機能を与えている
- ③ 継起的な接続表現がなく、一つ一つの場面が独立している
- ④ ストーリーの展開に起伏が感じられる

などの特徴が見られる。

一方、母語話者は、

- ⑤ 順接を中心に語りを進めている
- ⑥ 接続表現が話し言葉的である
- ⑦ 継起的な接続表現が用いられ、場面間の関連が緊密である
- ⑧ ストーリーが淡々と展開されている

などの特徴が見られた。

更に、中国語母語話者の語りを分析し、母語の影響があるかどうか検証した結果、日本語学習者には、中国語母語話者の語りにも共通する特徴として、「でも」「しかし」のような逆接が多く、「突然～」などの表現を用いて、場面一つ一つが独立しているという傾向が見られた。これは母語の影響であると考えられる。

一方、日本語の「で、そして」に当たる「然后，完后，完了以后，完了，后来」を用いて順接で場面を展開していく例も数多く見られ、日本語学習者ではなく、日本語母語話者に近い傾向も見られた。

第 5 部 本研究のまとめ

本論文は 4 部にわたって、中国語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者の「独話」に近い語りを表現上と構造上の両面から比較することによって、中国語を母語とする日本語学習者の語りの特徴を探った。更に、こうした中国語を母語とする日本語学習者の語りの特徴は日本語学習者全体に共通する傾向なのか、中国語を母語とする日本語学習者ならではの特徴なのかを、中国語母語話者の語りを用いて裏付けた。

第 8 章では、本論文のまとめを示したうえで、残された課題について述べる。

第 8 章 おわりに

8.1 まとめ

本研究は、中国語を母語とする上級日本語学習者が日本語で一まとまりの発話を行うとき、どのように情報を捉え、どのようにストーリーを伝えているか、語り方の傾向を明らかにするため、中国語を母語とする上級日本語学習者に字のない絵本を見せ、その内容を日本語母語話者相手に話してもらい、その言語表現について分析を行った。

また、その背景にあるものとして言語間の傾向的差異があるかどうかを探るため、日本語と中国語の母語話者にそれぞれ母語で話してもらい、日本語と中国語のデータを収集した。

分析の視点は、

- ① 中国語を母語とする上級日本語学習者が語りの談話を行なう際に、具体的にどんな表現を用いて語っているのかという表現的特徴
- ② 談話の最初に何を導入し、どう展開させ、最後にどう終結させているのかといった談話の構造

という二点による。

具体的には、表現の特徴を探るために、絵本の再現度、語彙の使用などの観点から分析し、構造上の特徴を探るために、談話の開始部、終結部の特徴、接続表現の使用をそれぞれ考察した。更に、日本語母語話者と中国語母語話者の母語による語りの談話を併せて分析し、日本語学習者の語りの談話の特徴の基盤となっている母語の影響を可視化し、中国語を母語とする日本語学習者の語りの特徴が形成された要因について突き止めることを目指した。以下、その詳細について述べる。

まず第 2 部では、日本語学習者と日本語母語話者の語りの全体像を把握するため、第 4 章において「絵本との一致度」を焦点に当て、日本語学習者と日本の母

語話者の違いを考察した。

その結果、絵本の語りにおいて、日本語母語話者は、絵本に描かれている内容を忠実に再現する描写を好み、心理描写をする場合でも外面からわかる描写に留めるのに対し、中国語を母語とする上級日本語学習者は、絵本に描かれた内容を脚色して大胆な内面描写を行ったり、絵本に描かれていない説明を語りの冒頭部と結末部に加えたりする傾向があることがわかった。

また、中国語を母語とする上級日本語学習者が脚色や説明を加える背景には、母語の転移による側面と、学習者としてのストラテジーによる側面、その両面が影響していることが明らかになった。

そこで、日本語学習者のこうした語りの特徴の背景にある要因を明らかにするため、第3部と第4部では、表現上と構造上における個々の特徴をより細かく分析したうえで、中国語母語話者のデータも加え、日本語学習者の語りの特徴とそれが形成された要因について全面的に分析した。

第3部第5章では日本語母語話者との比較から日本語学習者の実質語の使用について考察した、主に名詞的表現を中心に分析した。その結果、

- ① 日本語学習者は場所を表す名詞を用いて、ストーリーの内容を表すときにそれがどこで起きた出来事なのかを説明する傾向が強かった。
- ② 語りを進めるにあたって、登場人物(犬)に名前をつける傾向が見られる。

など、日本語母語話者と著しく異なる表現上の特徴がみられた。更に母語の影響かどうかを、中国語母語話者の語りと照合することによって検証した結果、「主人」「恋人」などの同形語、「車の中」のような「名詞+方位名詞」において、母語である中国語の影響を受けたものとして考えられる語句の使用が見られた。

第4部第6章では、日本語学習者の語りの構造を明らかにするため、まず、日本語母語話者の語りと比較し、日本語母語話者との違いを探った。また、中国語母語話者の語りを分析することによって、日本語学習者の語りの構造を形成している心的要因についても探った。

開始部において日本語母語話者と中国語母語話者は、絵本の出来事以外の情報

を加えずにそのまま語るのに対し、日本語学習者の語りは絵本の出来事以外の多様な情報を盛り込む傾向があることがわかった。出来事以外に、その出来事が起きる原因や理由、場面設定のような背景を語る傾向がある。また、絵本を見てからその内容を知らない聞き手に伝えるときに自分の感想やコメントをまず提示し、自分からみたストーリーの性格を聞き手に示そうとした特徴も見られた。

また、終結部においても、日本語母語話者と中国語母語話者が絵本の結末を絵本通りに伝えるのに対して、日本語学習者の語りは絵本のストーリーに対する感想や内容に対する評価的なコメントなどを加えて話を終結させていることがわかった。

日本語母語話者と中国語母語話者の語りの開始部と終結部における特徴が一致し、中国語学習者が異なったという結果から見れば、日本語学習者の語りの開始部と終結部の特徴を形成した要因は、日本語学習者が自身の伝達能力に自信がなければいけほど、たくさんの情報を提示して、その伝達能力の不足を補おうとする日本語学習者ならではのストラテジーにあるのではないかと考えられた。

検証の結果、日本語学習者の独特な語りの構造は、母語或いは母文化の影響が希薄であると結論づけた。

更に、第7章では、語りの構造における展開の仕方を考察するため、語りの文頭に出現した接続表現をどのように展開しているかという点に注目して、順接、逆接、場面展開、説明と大きく4つに分けて分析してみた。

その結果、日本語学習者は、

- ①逆接の接続表現が多い
- ②「突然、急に」などの副詞に場面展開の機能を与えている
- ③継起的な接続表現がなく、一つ一つの場面が独立している
- ④ストーリーの展開に起伏が感じられる

などの特徴が挙げられる。

一方、日本語母語話者は、

- ①順接を中心に語りを進めている
- ②接続表現が話し言葉的である

- ③継起的な接続表現が用いられ、場面間の関連が緊密である
- ④ストーリーが淡々と展開されている

などの特徴が見られた。

更に、中国語母語話者の語りを分析し、母語の影響があるかどうか検証した結果、日本語学習者には、中国語母語話者の語りにも共通する特徴として、「でも」「しかし」のような逆接が多く、「突然～」などの表現を用いて、場面一つ一つが独立しているという傾向が見られた。これは母語の影響であると考えられる。

一方、日本語の「で、そして」に当たる「然后，完后，完了以后，完了，后来」を用いて順接で場面を展開していく例も数多く見られ、日本語学習者ではなく、日本語母語話者に近い傾向も見られた。

8.2 残された課題

中国語を母語とする上級日本語学習者が語りの談話を行なう際の表現的特徴と談話の構造を明らかにすることが目的である。

そこで、中国語を母語とする上級日本語学習者に字のない絵本を見せ、その内容を日本語母語話者相手に話してもらい、その言語表現について分析を行った。その目的はまた、その背景にあるものとして言語間の傾向的差異があるかどうかを探るため、日本語と中国語の母語話者にそれぞれ母語で話してもらい、日本語と中国語のデータを収集した。

分析方法としては、日本語学習者と日本語母語話者が具体的にどんな表現を用いて語っているのかという表現的特徴と談話の最初に何を導入し、どう展開させ、最後にどう終結させているのかといった談話の構造という二つの側面から分析を行なった。

結果として中国語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者の語りが異なるのは、表現の面では母語の影響をある程度受けるが、構造上は日本学習者と中国語母語話者の談話展開の構造が一致せず、母語の影響が認められにくいという結論に至った。

しかし、本論文では、日本語学習者の語りの形成の要因を探る際に裏づけ資料として中国語母語話者のデータのみを参考した。その限界性として、やはり日本

語学習者の特徴がどこに起因するのかを検討する際に、対照できる他言語を母語とする日本語学習者のデータがないということである。

今後の課題として、まず資料収集において、今後は中国語を母語とする日本語学習者のみならず、ほかの言語を母語とする日本語学習者のデータも揃えたい。

また、分析の枠組みとしては、第4章では実質語の分析において、名詞的表現を中心に分析を行なったが、考察は行き届かない部分があった。

表現的特徴においては、名詞的表現の使用以外に、日本語母語話者は複合動詞の使用の傾向が強く、日本語学習者にはそうした傾向がみらなかったという特徴が見られる。

確かに、名詞的表現は母語の影響があるかどうかを検証するのにもっとも適切な項目ではあるが、やはり、語りの表現を全体的に見るのに、形容詞的表現や副詞、オノマトペなども視野に入れる必要があると思われる。

さらに、本論文で得られた結果をどのように日本語教育に反映させるかについて言及していない。

本論文のスタンスとしては日本語母語話者の日本語を必ず日本語母語話者と限りなく近づけるものではない。今回の調査で明らかになったことは、日本語学習者がある程度まとまった長い発話をする際に、日本語教育現場で指摘されがちな情報の欠如というものはなかった。むしろ言い過ぎている傾向にあるともいえよう。本論文の調査対象者である上級日本語学習者のこうした特徴を広く認知してもらい、日本語口頭能力指導に提案できるように整えることもまた、今後の筆者の研究に課せられた課題である。

本稿の各章と既発表論文との対応

本論文の章立てと既発表論文の対応関係を以下に示しておく。既発表論文と対応するものであっても、章によっては、既発表論文に大幅に加筆修正したものもある。なお、「書き下ろし」と記した章は、既発表論文をとくに踏まえずに書いた、本論文が初出の文章である。

第1部 本研究の前提

第1章 研究の動機と問題の所在

書き下ろし

第2章 先行研究の概要と本研究の位置づけ

書き下ろし

第3章 本研究の調査の方法

書き下ろし

第2部 語りの基本的特徴

第4章 「絵本との一致度」から見た学習者と日本語母語話者の語りの特徴

烏日哲(2010)「中国人日本語学習者と日本語母語話者の語りにおける説明と描写について—「絵本との一致度」の観点から—」『日本語教育』第145号 pp. 1-11

第3部 表現から見た語りの特徴

第5章 実質語の使用から見た語りの特徴

烏日哲(2012)「中国語を母語とする上級日本語学習者の語りにおける名詞の使用について—日本語母語話者と比較して—」『日本語／日本語教育研究』第3号(印刷中)

第4部 構造から見た語りの特徴

第6章 語りの開始部と終結部における特徴

烏日哲(2011)「中国語を母語とする日本語学習者の「語り」の冒頭部と終結部における表現的特徴—日本語母語話者と比較して—」『一橋大学留学生センター紀要』第14号 pp. 23-35

第7章 接続表現における特徴

書き下ろし

第5部 本研究のまとめ

第8章 おわりに

書き下ろし

引用文献

- 石黒圭(2007)「講義の談話の接続表現」『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム 西條美紀(研究代表者)2004~2006年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書』pp. 54-63
- 石黒圭(2008)『文章は接続詞で決まる』光文社
- 石黒圭(2010)「講義の談話の接続表現」『講義の談話の表現と理解』くろしお出版 pp. 138-152
- 烏日哲(2010)「中国人日本語学習者と日本語母語話者の語りにおける説明と描写について—「絵本との一致度」の観点から—」『日本語教育』第145号 pp. 1-11
- 烏日哲(2011)「中国語を母語とする日本語学習者の「語り」の冒頭部と終結部における表現的特徴—日本語母語話者と比較して—」『一橋大学留学生センター紀要』第14号 pp. 23-35
- 俵山雄司(2007)「語りの終結部の言語的特徴—日本語母語話者／非母語話者による4コマ漫画の内容を伝える語りから—」『日本語文法学会第8回大会発表予稿集』PP. 64-70
- 木田真理・小玉安恵(2001)「上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析—雑談の場での経験談の談話指導に向けて—」『日本語国際センター紀要』第11号 pp. 31-49
- 金慶珠(2008)『場面描写と視点—日韓両言語の談話構成とその習得』東海大学出版会
- 酒井峰男(1997)「日本語中上級者の「話す能力」を高めるための学習項目—日本語学習者の体験談を通して—」『岡山大学留学生センター紀要』第5号 pp. 35-50
- ザトラウスキー・ポリー(2002)「アニメーションのストーリーを語る際の話段と中心発話について」『表現研究』第76号 pp. 33-39
- 庄司恵雄(2001)「日本語学習者のストーリー・テリングは語彙選択から見て日本語母語話者とどこが違うか」『群馬大学留学生センター論集』第1号 pp. 1-11
- 田代ひとみ(1995)「中上級日本語学習者の文章表現の問題点」『日本語教育』第85号 pp. 25-37
- 張麟声(2001)『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉20例—』スリーエネットワーク

- 栴木由香(1989)「日本語学習者のストーリーテリングに関する一分析・話の展開と接続形式を中心にして」『日本語教育論集』第5号 筑波大学留学生教育センター pp. 159-174
- 古本裕子(1997)「ストーリーを語る場面に出現する身ぶりー接触場面と母語場面の違いー」『日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会 pp. 179-184
- 方梅(2000)「自然口語中弱化連詞的話標記機能」『中国語文』第5期 中国社会科学院研究所 pp. 459-470
- 許家金(2009)「漢語自然会話中“然後”的話語機能分析」『外語研究』第2期 外語教学与研究出版社
- 深川美帆(2007)「接続表現から見た上級日本語学習者の談話の特徴ー日本語母語話者と比較してー」『言葉と文化』第8号 pp. 253-268
- 堀川直義(1968)「文体比較法の一つの試み」『文体論研究』第12号 pp. 10-17
- 馬国彦(2010)「話語標記与口頭禅ー“然後”和“但是”為例」『語言教学与研究』第4期 北京語言大学語言研究所 pp. 69-75
- 増田真理子(2000)「日本語学習者と母語話者のストーリーテリング文を比較するー4コマ漫画のストーリー内容を書いたテキストの分析からー」『多摩留学生センター教育研究論集』第2号 pp. 13-25
- 南雅彦(2005)「日本語学習者のナラティブーラボヴィアン・アプローチー」『言語学と日本語教育IV』くろしお出版 pp. 137-150
- 森田良行(1987)「文の接続と接続語」『日本語学』第6巻第9号 明治書院 pp.28-36
- 李麗燕(2000)『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究 会話管理の観点から』くろしお出版
- 渡邊亜子(1996)『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版
- 渡辺文生(2003)『日本語学習者と母語話者の語りの談話における指示表現使用についての研究』(平成13-14年度科学研究費補助金(基盤研究(C))(2)研究成果報告書)
- Chafe, W. (1980). *Pear Stories*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Labov, William. (1972). *The Transformation of Experience in Narrative Syntax. Language in the Inner City*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

参考文献

- 相原林司(1987)「接続語句と文章の展開」『日本語学』第6巻第9号 明治書院
pp. 37-45
- 庵功雄(2001)『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』スリーエーネット
トワーク
- 庵功雄(2007)『日本語研究叢書21 日本語におけるテキストの結束性の研究』く
ろしお出版
- 池上嘉彦(1983)「テキストとテキストの構造」『日本語教育指導参考書11 談話の
研究と教育 I』国立国語研究所 pp. 7-42
- 石黒圭(2004)『よくわかる文章表現の技術Ⅱ』明治書院
- 石橋玲子(2002)『第2言語習得における第1言語の関与—日本語学習者の作文産出
から—』風間書房
- 石橋玲子(2007)「日本語学習者の文章構成における第1言語の影響—中国語母語話
者の論説文を対象に—」『比較文化研究』第76号 pp. 1-10
- 伊豆原英子・嶽悦子(1992)「中・上級学習者の話し言葉(独話)の分析と考察—
情報伝達を通して—」『日本語教育』第77号 pp. 103-115
- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 井出祥子・櫻井千佳子(1997)「視点とモダリティの言語行動」田窪行則編『視点
と言語行動』くろしお出版 pp. 119-153
- 大関浩美(2010)「日本語学習者はどのような外の関係の名詞修飾節を使っている
か」『言語文化と日本語教育』第39号(佐々貴義式先生追悼記念号) pp. 50-59
- 岡本能里子(1990)「電話による会話終結の研究」『日本語教育』第72号 pp. 145-159
- 尾崎明人(1981)「上級日本語学習者の伝達能力について」『日本語教育』第45号
日本語教育学会 pp. 41-52
- 金子朝子(2004)「スピーキング」『第二言語習得研究の現在 これからの外国語
教育への視点』大修館書店 pp. 161-179
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析—』大修館書店
- 唐津麻理子(2011)「ストーリーテリングにおける語り手の自己表出と語彙・文法
表現の使用—会話物語「サンタクロースの衣装を買った」の分析—」『日本
語／日本語教育研究[2]2011』ココ出版 pp. 267-283

- 川崎(森)千枝見(2007)「日本語学習者の言語形式の選択—ストーリーテリングによる「受身・使役」と競合する形式に関する一考察—」『広島大学日本語教育研究』第17号 pp. 19-25
- 金慶珠(2001)「談話構成における母語話者と学習者の視点」『日本語教育』第109号 pp. 60-69
- 金水敏・今仁生美(2000)『現代言語学入門4 意味と文脈』岩波書店
- 甲田直美(2001)『談話・テキストの展開のメカニズム—接続表現と談話標識の認知的考察—』風間書房
- 国立国語研究所(1963)『話しことばの文型(2)—独話資料による研究—』国立国語研究所報告23 秀英出版
- 国立国語研究所(1983)『日本語教育指導参考書11 談話の研究と教育 I』大蔵省印刷局
- 酒井峰男(1997)「日本語中上級者の「話す能力」を高めるための学習項目—日本語学習者の体験談を通して—」『岡山大学留学生センター紀要』第5号 pp. 35-50
- 坂口昌子(2007)「非母語話者と母語話者の談話展開上の問題点について—風景描写の談話から考える—」『無差』第14号 pp. 23-38
- 坂本勝信(2005)「中国語を母語とする日本語学習者の「視点」の問題を探る」『常葉学院大学研究紀要』第21号 pp. 1-10
- 桜木ともみ(2003)「日本語学習者の使用する名詞修飾構造の特徴—中国語母語話者の縦断的発話資料の分析から—」『広島大学日本語教育研究』第14号 pp. 57-64
- 佐々木泰子(2010)「接触場面と母語場面—体験談の終結部からみたその特徴—」『言語文化と日本語教育』第39号 佐々貴義式先生追悼記念号 pp. 33-40
- ザトラウスキー・ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 庄司恵雄・野口裕之・金澤眞智子・青山眞子・伊東祐郎・迫田久美子・春原憲一郎・廣利正代・和田晃子(2004)「大規模口頭能力試験における分析的評価の試み」『日本語教育』122号 pp. 42-51
- 姜春枝(2007)「中国人日本語学習者の不適切な漢語語彙使用について—品詞混同と共起する語の誤りを中心に—」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第10輯 pp. 289-294
- 杉田くに子(1994)「学習者の日本語での文章構造の背景」『『アメリカ・カナダ

- 大学連合日本研究センター紀要』第17号 pp. 31-47
- 鈴木美加(2007)「日本語学習者はどのように語を把握しているか—語彙の結びつけ練習の解答の傾向からわかること—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第33号 pp. 129-137
- 砂川有里子(2005)『文法と談話の接点—日本語の談話における主題展開機能の研究—』くろしお出版
- 辻村成津子(2005)「擬音語・擬態語の言語学的重要性と日本語教育」『言語学と日本語教育IV』くろしお出版 pp. 223-231
- 陳岩(2005)「中国語の干渉による日本語の誤用—文化的な原因を中心に—」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第8輯 pp. 59-68
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一(1990)『ケーススタディ日本語の文章・談話』桜楓社
- 時枝誠記(1960)『文章研究序説』山田書院
- 中井陽子(2003)「初対面日本語会話の話題開始部／終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』第16号 pp. 71-95
- 中井陽子(2005)「談話分析の視点を生かした会話授業—ストーリーテリングの技術指導の実践報告—」『日本語教育』第126号 pp. 94-103
- 中村明(1991)『日本語レトリックの体系』岩波書店
- 中村明 編(1995)『感覚表現辞典』東京堂出版
- 西野容子(1993)「会話分析について—ディスコースマーカーを中心として—」『日本語学』第12巻第5号 明治書院 pp. 89-96
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房
- 橋内武(1999)『ディスコース 談話の織りなす世界』くろしお出版
- 橋本陽介(2009)「「話調」による話法の間接度について—日本語と中国語の分析から—」『文体論研究』第55号 pp. 1-11
- 林四郎(1973)『文の姿勢の研究』明治図書出版
- 林宅男(2008)『談話分析のアプローチ—理論と実践—』研究社
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 彭飛(2006)「中国語と日本語の対照研究が抱える諸問題(5)—中国語と日本語の形

- 容詞の対照研究の諸問題及び形容詞指導の注意点をめぐって一 『無差』 第13号 pp. 21-51
- 益岡隆志(1997) 『新日本語文法選書2 複文』 くろしお出版
- 増田真理子(2001) 「<談話展開型連体節>—「怒った親は子どもをしかった」という言い方—」 『日本語教育』 第109号 pp. 50-59
- 松木正恵(1992) 「『みること』と文法研究」 『日本語学』 第11巻第9号 明治書院 pp. 57-71
- 松本隆(1996) 「中上級日本語学習者の悪文—読み手を悩ますわかりにくい文の類型—」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』 第19号 pp. 53-71
- 村上千栄子・塩見式子(2006) 「上級日本語学習者の口頭伝達能力に関する一考察—ストーリーテリングにおける日本語母語話者との比較—」 『山口幸二教授退職記念論集』 立命館大学法学会 pp. 291-330
- 松木啓子(1999) 「語りのディスコース現象—社会行為としての言語使用再考—」 『言語』 第28巻第1号 pp. 40-47
- メイナード, 泉子. K. (1993) 『会話分析』 くろしお出版
- メイナード, 泉子. K. (1997) 『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性』 くろしお出版
- 森田良行(2006) 『話者の視点がつくる日本語』 ひつじ書房
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩(2000) 「認識のモダリティとその周辺」 『モダリティ』 岩波書店 pp. 81-159
- 山根智恵(2002) 『日本語の談話におけるフィラー』 くろしお出版
- 劉月美(1985) 「接続表現における現代日本語と中国語の比較」 『甲子論集 林巨樹先生華甲記念国語国文論集』 武蔵野書院 pp. 81-98
- 渡辺文生(1999) 「ナラティブ・ディスコースにおける節のくりかえし」 『山形大学日本語教育論集』 第2号 pp. 53-68
- 渡辺文生(2005) 「日本語の語りの談話における指示表現のあいまいさとわかりやすさについて」 『言語学と日本語教育IV』 くろしお出版 pp. 125-136